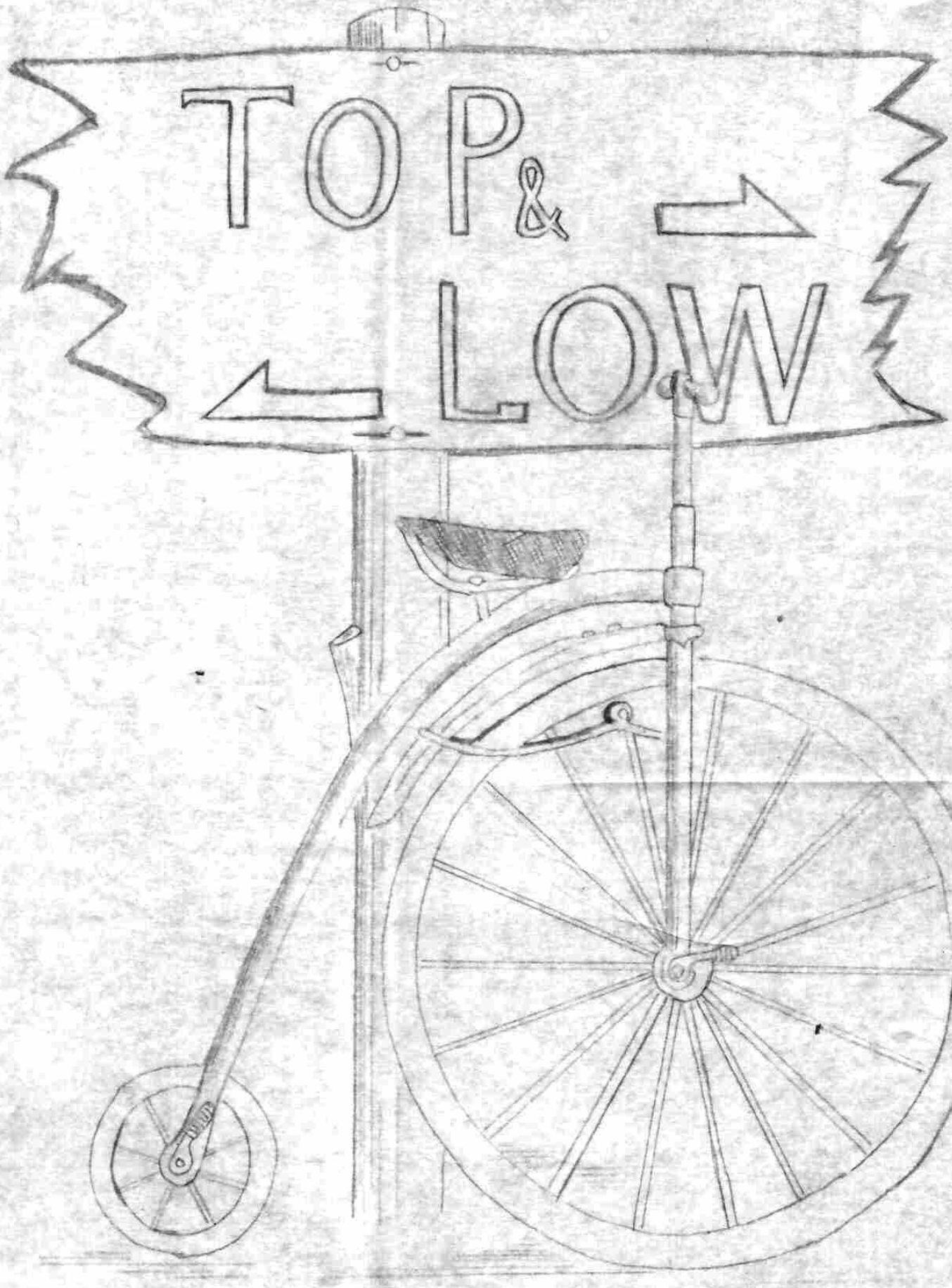


Kuri;

東京工業大学サイクリング部

昭和50年 ツーリングレポート

目次

ページ	タイトル	報告者名	
1－A	サイクル オリエンテーリング	小島 史夫	3年
3－A	春合宿レポート	清口 正典	2年
3－B	沖縄サイクリング紀行	杉浦 光幸	3年
4－A	鎌倉見物ハフリーラン	深木 亜	1年
5－A	浅間高原フリーラン	岩根 泰彦	3年
6－A	新歓ラン	栗原 和明	1年
7－A	予備合宿	名取 勝	1年
	夏合宿		
8－A	○津軽・十和田・男鹿	宝谷 一大	1年
B	○下北・十和田・三陸	深木 亜	1年
C	○下北・十和田・田沢湖	金谷 健	1年
D	○津軽・十和田・三陸	望月 英臣	3年
10－A	財の信州路	原 啓一	3年
B	東海道ひとり旅	金谷 健	1年
C	信州ソロツーリング記	竹崎 信吾	2年
D	駅舎ビーナスライン	田村 剛	1年
E	京都・神戸のんびりフルラン	宝谷 一大	1年
F	筑峠	藤原 亨	3年
G	荻笠峠、鼻居峠、明田高原	堀 恵一	3年
11－A	工大祭参加記録	鈴木 俊明	1年

編集者 藤原亨、宝谷一大、栗原和明

1A-1

サイクルオリエンテーリング

小島史子

書記にオリエンテーリングの原稿を書けと言われた。一年も前のことを詳しく覚えていられる訳がない。何とか思い出そうと努力はしてみたが……

我が、T.I.T.C.C恒例のサイクルオリエンテーリングは、冬枯らしの吹く中、一九七五年一月十九日、川崎市を中心に挙行された。

競技区域は、地図を見ればわかる様に、走ってみて実に変化に富んでいる。田地の中の舗装道路を走っていたかと思うと、山の中の泥道を走っていたりする。その上、坂道もかなりのものである。

さて、競技開始である。STARTは田園都市線梶ヶ谷駅、持ち時間確か二時間半で、GOALの二四六号線二子橋下を目指すのである。自転車は、藤原から借りた黄色のあの団マークの自転車であるが、あの自転車はサドルの調子が悪い。座金が馬鹿になっているのだろう。(藤原はこのサドルに愛着を持っているみたいだ。一年も経ってもまだ直さない所を見ると、何か深い理由でもあるのだろうか。)

私は、点数は低くとも密度の高い所を回ろうとコースを選んだ。ところが最初のポイントでつまづいてしまった。ポイントを見つけることが出来ず、その上ぬかるみで転倒してしまったのである。ここで少しいじけてしまったが、次のポイントからは割とスムーズに回ることが出来た。川崎にお

ける都市化の波は激しく、地図にない所が出てくる。武蔵野線ケ谷貨物ターミナルもその一つで、トンネルをくぐって反対側まで行かねばならず、苦情が聞かれた。

神社の階段数を数える所で岩根に会った。彼は当時、あの油のべっとりついたつロントバックをつけて走っていた。この数ヶ月後、彼の自転車は盗まれたが、不思議にも戻ってきた。しかしフロントバックは帰ってこなかった。彼は、あまりにも素晴らしいバックだったので犯人が手放せなかったのだろうと言っているが、あまりにもイモすぎるのですぐにどぶに捨てられたのだろうというのが大勢である。彼と別れ、再びペダルをこぐ。二四六をこえ美しが丘の団地へ行くと日比野に会った。ここの問題は、歩道橋の完成年月日を記せというのであるが、目的の歩道橋が見つからず、彼はここに数十分いるという。しかし、この辺の歩道橋の完成年月日が、皆同じなのでたぶん同じだろうということで妥協、次のポイントへと進む。産院のポイントを回った所で土方さんと会う。残り時間も少なく、急いで回ろうとするが、途中、長尾での坂（十数%）があったろう）、津田山霊園より津田山駅へ下る道の悪さ（降りて押した）など、難路？悪路？が行く手をはばむ。しかし持ち時間を十分余残して無事到着。しるこを食べる。

得点は二七五点で中川さんと同点、じゃんけんの結果、中川さんが優勝、私は二位となった。記念撮影をして、今年度のサイクルオリエンテーリングは終了した。

3A－1

『春合宿レポート』

期間　昭和五十年三月二十九日～四月五日
参加者　岩根　小島　原　藤原
　　樺口　毛利

<コース>

三月二十九日

宇和島駅に我々一年生三名（野崎、毛利、樺口）が到着したのは、夜の九時頃であった。駅には先発していた二年生四名（岩根、小島、原、藤原）が迎えに来てくれていた。近くの食堂で夕食をとってから自転車を組み立ててキャンプ場へ向かった。キャンプ場は駅から十五分ぐらいの所で、海に近かった。さっそくテントを張り寝ることになったが、この夜は風が激しく吹いて、テントはバサバサと音をたて、ホールはしなったりして、とても寝られたものではなかった。

三月三十日

昨夜は風のためにみんな寝られなかったようだった。しかし朝食のパンは実にうまかった。よほど腹が減っていたのだろう。

一時頃、船越につく。ここでグラスボートに乗り、海中公園を見るつもりでいたのであるが、残念ながら海が荒れているので、船は欠航とのことだった。仕方なく城辺町まで戻り、東海小学校の校庭にテントを張らせてもらった。夕食は焼肉にしたのだが、テントの中で炊いたので、煙はこもるし、グラスボートにはあがしみついてしまい、あまり気持のよいものではなかった。

宇和島より城辺町へ船越より城辺町

（走行距離　75キロ）

三月三十一日

朝、小学校の生徒が集合するというので、あわてて出発する。宿毛を通り柏島へ向った。相変らず天気は悪く、海は荒れ、寒さかこたえて、景色を見ていてもあまり感じるものはなかった。

柏島にはいってゆく途中に長浜がある。ボートが見えるところなので見晴らしは良いのだが、天候が悪いのが残念だった。途中、野生のリスに出会った。天気をやまと、寒いあって食べていた。

柏島では、キャンプ場がわからず困っていると、近所のおばさんがいろいろと世話してくれて、護念寺という寺の庫に、テントを張ることになった。このお寺の和尚さんも少し親切にしてくれて、お風呂に入れてもらったり、ご飯をたきなおしてくれたりして、本当にありがたかった。なおこのお寺に泊めてもらう旅行者もかなりいるようで、いろいろと書かれノートがおいてあった。

夕日を見たいと思っていたのだが、雲にかくれて見えなかった。燈台まで登っていた途中も残念そうに戻ってきた。しかし夜は美しいのである

よく疲れそうである。

成辺町に宿をとり柏島

（走行距離　50キロ）

四月一日

今日も風が強い。テントをたたんでから出発する。お向さんの家の水道をなおすのを手伝ってから出発した。

竜串につく。海中展望塔は海が荒れていてほとんど見えない。えさをつるしたカゴの所にはたくさんのあまかの群がいるだけである。誰かさんは、階段を見上げていたっけ。次にサンゴ博物館へ行った。いろいろなサンゴや加工品が展示されており、美しく、高価なものばかりである。

外に出ると雨がものすごい勢で降ってきたので民宿をとることにした。ところが夕飯を終えるとぱっと晴れて、たびまで出て来る始末。まったく馬鹿にしてやがると、全員、後悔したが後のまつりである。食事の仕度をしなくてよいので、海岸を散歩した。地層が侵食されて、おもしろい形になっている。淡々とかつぷしている人達がいたので、みんなでも夜釣りをすればよかったなぁ、

柏島に竜串（走行距離　45キロ）

四月二日

昨夜はほんの少ししか釣れなかったようだった。朝食の時、先利はやたらと早く食い終えたためにおかわりをしたが、おかずがなくなってしまった。それで、小島さんから、たくわんを一切もらって一杯をたべてしまった。野崎も半切で

で一杯食べた。

グラスボートに乗って、見残しへ行った。水は緑色ではごってお り、魚はほとんど見えなかった。見残しは不思議な岩でできていた。つまり小さな穴ボコがいっぱいあいているのである。どうしてあのようなウレイターが できるのであろうか。

続いて貝の博物館へ行く。ここは全国、成功した場所である。本当いろいろな貝があるもので、色・形の美しいもの、奇妙な形のものがあり、一見の価値がある。

見残しをまわる。燈台　みんなで乗っかって写真をとった。大きな岩、岩つばめなどが思い出される。また人の数も多い。近くにキャンプに適当な所がなかったので、少し走ってきれいな砂浜の近くの公園でキャンプした。

竜串し足摺岬し鍵掛付近の海岸

（走行距離　60キロ）

四月三日

不便な所にキャンプしたものだ。水もトイレもない。朝　ポリタンクの水が　何故かなくなっていた。どうにかカンヅメ一ドルをつくるだけは残っていたので助かった。

中村駅に着く。市役所で聞いて、SLホテルの前の児童公園にキャンプすることにした。夕食は肉づめピーマンちゃんぽんというものを食った。みんなは、もう食えないと言っていたが、それでもデザートに、おはぎとバナナを食べちゃった。

鍵掛し中村　（走行距離　30キロ）

四月四日

今日は予定を変更して高知まで輪行である。時間が早いので、チワキは高知駅で出すことにした。

中村L（輪行）L高知
（走行距離　25キロ）

四月五日

二年の四名は原さんの親の家へ行くことになっており、朝、我々三名は、高知駅から帰りの列車に乗った。高松で、すぐ帰宅するというも利と別れ、野崎と私は小豆島に一泊して帰ることにした。

翌日の小豆島はお天気もよくて、実に快適であった。ひがめもまばらしくて、も利はもったいないことをしたものだと思う。

なお、岩根さんは、大歩危・小歩危と祖谷渓をまわったそうである。もう一度四国へ行くことがあれば、今度はそちらのほうへも行ってみたいと思う。

高知につリて、土電西武とのらいう手パー
ートの民宿（東天紅）で、肉入りスープパの
A 民宿をとった。汚れたかっこの7人衆は一
体どんな風に見えただろうか。腹を満たして
、桂浜へ向う。ここは七色の石で有名のよう
だが、大きくて、それはなる石は、すでに拾う
われてしまったらしく、小さいのしかなかった
のは残念だった。

次にビーチでもりレールに乗り、五台山へ登
った。山頂からの市街・平野・瀬戸海のながめ
はかぎりのものだ。牧野植物園にも入園し
たかったが、閉園時間が過ぎたのでやめに
した。

若合宿も今日で終りである。国民宿舎でビ
ールで合宿の無事終了を祝った。

——— 又モ ——— M E M O ——— ゐも ———

3B-1

☆☆星砂とサンゴ礁の海☆

（沖縄サイクリング紀行）

杉浦充幸

真青な空の下、エメラルドグリーンに輝くサンゴ礁の海の上を滑り込むようにして、我々の乗った船は今、那覇港に着かんとしている。目の前には陽に照らされた那覇の街々が広がっている。オキナワだ。日本と言っても本土からはるか南方の、そして数年前までは アメリカの占領下にあった島、沖縄だ。サンゴ礁の海に映える島を前にして、私はこれから走らんとする未踏の地へ思いを巡らしていた。

前々日の正午に東京晴海を出港したこの「なは丸」は予定を6時間遅れて、3月20日午後3時に那覇港へ到着した。それにしても、5千トンもある大きな船がシケで木の葉のごとくに揺れて気分が悪く、また船室で寝ている以外ほとんどする事がない退屈な、3日間にもわたる51時間もの長い船旅がこんなにも辛いものだとは思いもよらなかった。それだけに、いかにも遠くへやって来たという感じがする。我々2人は重い輪行袋を担いで、やっとの事で下船すると早々と愛車を組みたかかった。今回の沖縄ツーリングは当初3人で行く予定であったが、1人が諸々の都合（大方は金銭面であろう）により行けなくなり2人で行く事になった。そこで出発前、宿泊と食事をどうしようかと迷った。でも結局、荷物が少し多くなるが安くつく点で、テントと炊事用具を持って行く事にした。しかし、テントには多少不安が残

る。と言うのは、沖縄には例の猛毒のハブがいるのだ。しかし、そんな事は言っていられない。ハブが怖くてサイクリストがつとまるか！と言う事で、テントを張る時は人家などの人けのある場所に張ろうという事にした。

さて、乗船客や見送りの人々で混雑する中で愛車を組み上げると、さっそく走り出す事にした。雑踏の中をスイスイと走り抜けたまでは良かったけれども、あっと思い！道路の左側を走っているではないか。――そうです。ここは沖縄です。車は右を走らなければいけないのです。自転車においてもまたしかり。ついつい慣れで左側へ行ってしまった。沖縄は復帰後、通貨はドルから円に変っても、道路は相変らず右側通行なのであります。よってしかるべく、道路の右側に寄って走り出す事にしました。右側通行は初めての経験で、初めのうちは戸惑ったがやがて慣れました。でも、時々左側通行のくせが出る事があります。当り前の話ですが、右側通行というのは右折は楽で左折は厄介です。また、横断する時は左を見てから右を見て渡ります。すべて逆なのです。ただ難点なのは、自転車に乗り降りする時や押して歩く時など、車の通る左側に体がきてしまう事です。しかし、右側通行もオツなもんで日本本土では味わえない沖縄ならではのものです。さて、初日はもう夕暮れも近いので那覇市内で泊まる事にして、テントを張る場所を捜した。その結果、奥武山公園に決定。「奥武山」は「おうのやま」と読みます。沖縄では「武」は黙字で読みません。沖縄には地名と人

名に似たものが多く、また読み方も独得なので苦労しました。

3B

明くる朝、早々と那覇を立ち南部へと向かった。沖縄本島は左回りに一周し、その後石垣島などの離島を走る事にコースを決めた。南部は「沖縄戦跡国定公園」になっている。今日は戦跡地めぐりになりそうだ。那覇空港を右手に過ぎ糸満市へと国道を突っ走る。暑い。さすが沖縄、緯度が低いだけあって3月だというのに日差しが強い。サングラスを掛ける。初春というより初夏だ。しかし、風は冷たくカラッとしている。やはり時節柄、日が陰ると多少寒い。やがて右手に海が見えて来た。綺麗だ。サバニ（クリ舟）のコントラストが実にクリアーだ。ビューティフル。こんな美しい沖縄の海を見ながら、やがて我々は糸満に着いた。ここで摩地腹門中の墓を見たのち、姫百合の塔へと向かう。途中、国道からそれて小道をのんびりと走る。サトウキビの甘い香りがあたりに漂い、南国の陽を浴びて牛は寝そべり蝶が舞っている。実にのどかである。「ひめゆりの塔」――沖縄戦の犠牲となった特志看護婦の女生徒たちを祀ってある。塔の前に最期を遂げた大きな壕があり、無常なる花華や折鶴に心が痛む。ここに限らず、南部戦跡地区には沖縄戦の慰霊碑や塔がいたる所に建ってある。摩文仁丘に行く。明るい陽光とハイビスカスやデイゴの真赤な花に彩られた摩文仁丘に立ち、澄みきった大空、紺碧の海原、そ

して静かに打ち寄せる波の音は平和で素朴な沖縄を感じさせるが、一たび無数の弾痕や焼けただれた土壌に目をやると、かつて硝煙弾雨の非惨な戦場となった沖縄が思い忍ばれる。そして、これらの戦跡地が、例のごとく土産物屋の建ち並ぶ名所として観光地化されているのには、私自身複雑な気持ちに強いられる。

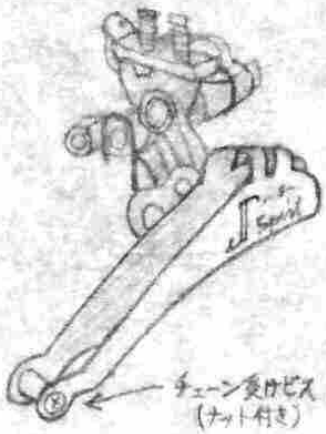
戦跡地めぐりの後は、規模では日本で3番目だが鍾乳石の数は日本一という鍾乳洞「玉泉洞」へと向かった。ここは全くもって観光地化されていて、ケイブランドという公園の中に玉泉洞があり、入園料と入洞料と2度料金を取られた。洞内に入ると、なるほどツララの数は驚くほど無数にあり、結構広い。だが、一般の鍾乳洞と比べ、非常にムンムンしている。やはり南国のせいだろうか。洞を出ると陽がもう傾いている。この日の晩は、少し行った玉城村当山という部落で親切にも公民館を使わせてもらい、のんびり飯を作ってそこで寝る事となった。

翌日も素晴しい天気である。ソテツの植えてある道路を軽快に飛ばす。しばらくして中城城跡に着いた。沖縄には琉球王朝時代の名残りの城跡が色々な所にあるが、城そのものが残っているのはなく、せいぜい城壁の石垣が残っているくらいである。ここもそうである。沖縄の城の石垣は日本のと多少おもむきを異にし中国風で独得である。石垣の上に登ると、さすが城跡だけあって高所にあり眺めは抜群である。その後、古い沖縄の家「中村家」を見て一路「コザ」（沖縄市）へと向かう。広い道路を走り街へ入

って行くと、基地の街コザと言うだけあって横文字が多く目立つ。一瞬、アメリカの街中を走っている錯覚に陥る。昼食に食堂へ入る。メニューを見ると、「ソーキランチ」「中味」「おかず」「ソーキソバ」……etc. わけがわからず店の人に聞くと、ソーキはアバラ骨の付いたブタ肉、中味(なかみ)はその名の通り中身でハラワタ、おかずもおかずでヤサイイタメの事だそうである。ソバは沖縄では「沖縄ソバ」の事で、ラーメンに似ているが、平べったくて腰が強い。味も変っていて独特な味がする。また、沖縄は野菜が豊富らしく、カツ丼などの中には色々といっぱい野菜が入っている。我々が一体何を食べたかはないしょ。食後コザの街をぶらつくと、日本離れした店や外人を多く見かける。センター通りなどは全く日本語を見かけない。いいかげん歩き飽きたので走り出す事にした。

勝連(かつれん)半島に、近くの平安座(へんざ)島まで延々3.7kmに及ぶ一本の海上道路(橋ではない)がある。そこをちょっと走ってみた後、我々はこの日の宿泊予定地である石川市へと急いだ。途中、峠の坂の登りで一人の外人が自転車を押して登っていた。通りすがりに「ハロー」と声をかけると、彼は元気よく「ハロー」と返してきた。少し行った所で後を振り向くと、何とあの外人が頑張って乗って追いかけて来るではないか。我々は追いつかれまいとして、きつい登りをピッチを上げてペダルを踏んだ。やがて彼は見えなくなり、坂を登り切って下ると、そのまま石川市へと滑り込んだ。と、そこまでは良かったのであ

るが、急にガチャンという音と共にチェーンが外れてしまった。見ると、フロントディレイラーのチェーン受けビスが無くなっているではないか。あたりの地面を捜す。無い。途方に暮れていると、そこへさっきの外人が戻って来た。どうかしたのかと彼は聞く。ディレイラーが壊れたのだと答える。すると彼は、この先にバイクショップがあると指差して、その場所を説明し出した。（この外人との会話はもちろん英語である。）しかし、自転車屋へ行っても仕方ないので針金で留める事にした。直し終わると、もうその外人はいなかった。我々は今日の泊りを民宿に決め、宿を捜しにかかった。町の中をぶらぶらしていると、またさっきの外人が現われた。彼はディレイラートのチェーン受けビスを差し出した。何と、彼は自転車屋へ行ってビスを貰って来てくれたのである。私はビスを受け取った。だが、ボルトとローラーだけでナットが付いていない。私のは「スペート」なのでナットが必要なのである。そこで私は彼に「Nut is not!」と、ちょっとシャレて言ってみた。彼は初めはキョトンとしていたが、意味が解かると笑い出した。そして、そのビスを貰って来た自転車屋を我々に教えてくれた。我々はその外人に礼を言って別れ、その自転車屋へ行きナットを貰ってディレイラーを直したのである。親切な外人に出合ったこの日の晩は、民宿のふとんの中でぐっすりと寝たのであった。

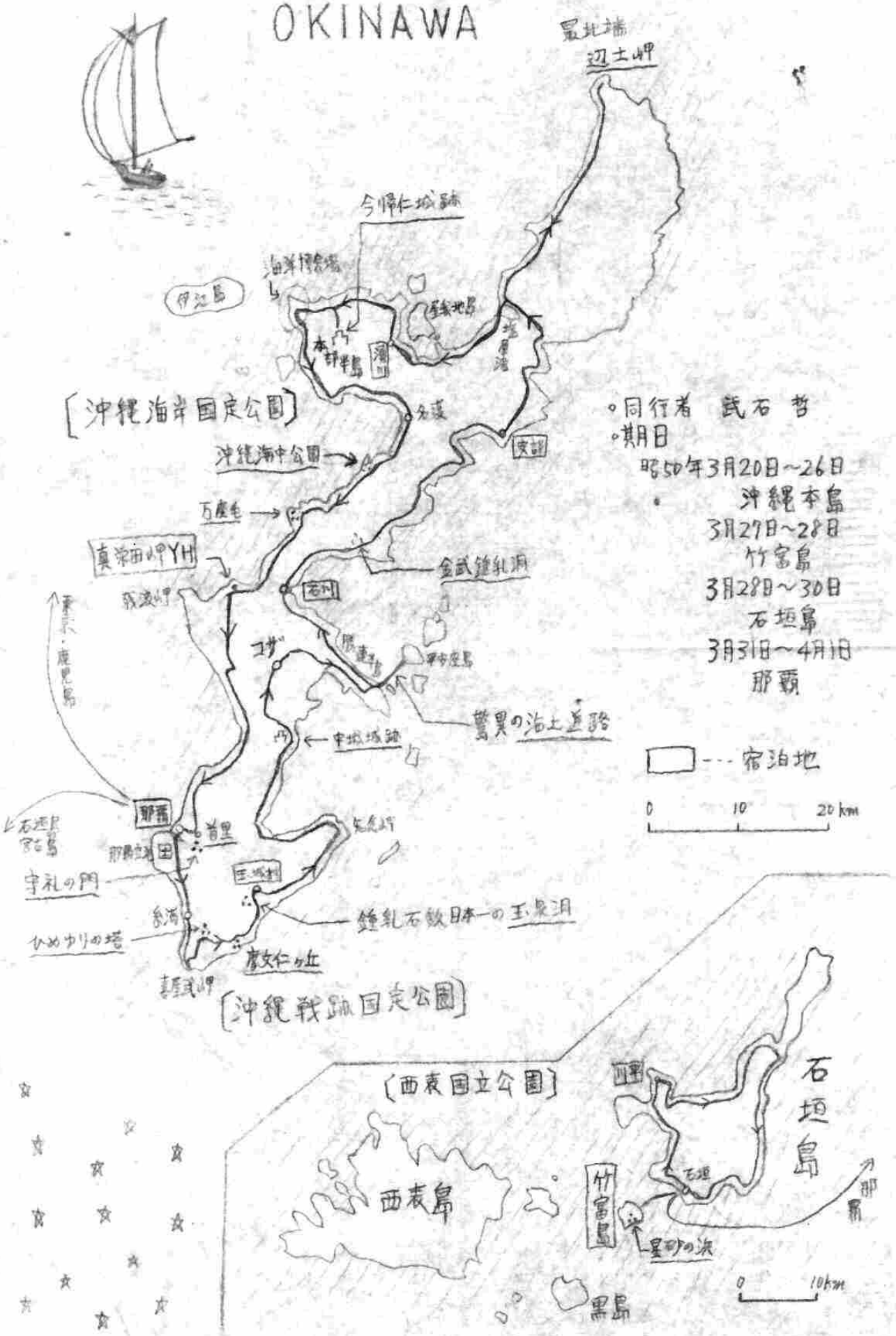


翌日は天気が良くなかった。朝、石川市を文
ち、金武鍾乳洞までは良かったが、鍾乳洞を出
発しようとしたところでパンクしてしまった。
今回の沖縄ツーリング中において2度目のパン
クである。前々日に1度目のパンクをしている。
前日はディレイラーが壊れるし、今日またパン
クである。沖縄へ来て毎日何かしら支障を起こ
している。明日、事故でも起こさなければよい
が。などと考えながらパンクを直す。相棒は先
へ走って行ってしまったので一人で直している
と、そこへ雨が降り出して来た。大急ぎで新下
へ自転車ごと大移動した。そして、そこで雨を
しのぎながらパンクを直したのであるが、空気
を入れてみると、どうもおかしい。そこでもう
一度調べ直したら、実の足もう一ケ所別の所が
パンクしていた。やっとの事でパンクを直し終
えて、走り出そうとした。だけど、雨はまだた
くさん降っている。やむまで待とうと思ったが、
だいぶ時間が経ってしまったためで雨の中を出発
した。相棒はどこにいるのだろう。雨中を夢中
で、ずぶ濡れになりながら素っ飛ばし、やっと
バス停で雨宿りをしている相棒を見つけた。彼
は雨が降って来たので雨宿りがてら私を待って
いたのであるが、1時間も待たされたと、ぼや
いていた。小降りになるまで、ここでもう少し
待つ事にした。結局、この日はその後もたいし
て走る事が出きず、夕方小さな部落に空き家が
あったのを幸いに、その空き家を借りて泊まる
事にした。その晩はそこで自炊をし、沖縄の地
酒「泡盛(あわもり)」でイッパイやりながら眠りに就いた。

翌朝、良い天気の中を出発した。前日の雨で予定が遅れてしまったので急ごうとするが、道が悪くてだめだ。このあたりから北部山岳地域に入るので、東海岸の道は国道でありながら、地道でアップダウンが多くて非常に走り難い。余りにもペースが悪いので、仕方なく沖縄本島北部は東海岸から一周するのを断念し、西海岸へ出て西岸沿いを最北端「辺土岬（へど）」まで往復するコースに予定を変更した。島を横断して西海岸の塩屋湾へ出てみると、西海岸の道は非常に良い。これなら今日中に往復できる。往復するなら荷物は不用と、近くの売店のおばさんに荷物を預かってもらい、沖縄本島最北端の辺土岬へと向かった。辺土岬まで往復50km余りの道を軽快に飛ばす。左はサンゴ礁の海である。沖縄本島の中部から北部にかけての西海岸一帯は特に「沖縄海岸国定公園」になっていて、一段と綺麗である。辺土岬に着き最北端の絶壁に立つと、眼前はるかに鹿児島最南のヨロン島が見える。ここからの眺めもまた感慨ひとしおである。時間がないので早々帰途に就いた。潮の香りの漂う中を、鮮烈なる西日を浴びて我々は快適にペダルを踏んだ。売店に戻り荷物を受け取って、再び装備して走り出した。日も暮れた頃、近くにヨットハーバーがあったので、その空き地にテントを張ろうと決めた。そこで、ここの管理人のいる所へ行った。すると、ここの管理人は親切にもここにあるキャンピングカーに泊まるように勧めた。結局、我々はその晩そのキャンピングカーの中に寝かせてもらう事になった。

3 B-t

OKINAWA



◦同行者　武石 哲

◦期日

昭50年3月20日～26日
沖縄本島
3月27日～28日
竹富島
3月28日～30日
石垣島
3月31日～4月1日
那覇

明くる日は本部半島をぐるっと回り、緑に埋もれた長い石の保塁のある今帰仁城跡へ行き、沖縄海洋博会場の工事現場のそばを通り、名護市へ出て、それからブナセ岬の沖縄海中公園の中にある海中展望塔に行き、次は万座毛へと走った。走っていると、〇〇ビーチと称する海水浴場がたくさん目につく。特に西海岸は大きなビーチが色々あり、中にはインブビーチという変な名前のがあったりする。この日は真栄田岬ユースホステルに泊まった。

次の沖縄本島一周最終日は、嘉手納基地などの米軍基地のそばを通って首里へ行き「守礼の門」などの史跡をぶらぶら巡り、夕方那覇港に着いた。そして、再び愛車をバラし石垣島行の船に乗り込んだのである。

翌朝石垣島に着くと、輪行袋のまま自転車を預け、ホーバークラフトに乗って「竹富島」へ渡った。竹富島は沖縄で最も美しい島と言われている。周囲たった9kmの小さな島で、サンゴ礁が隆起して出来た島である。サンゴ礁の上をシブキを上げてホーバークラフトは5分で島に着いてしまった。白砂の一本道を島の中央へ歩く。部落は島の中央にあるのだ。この島の道はすべて部落を中心に四方へ延びている。まず、この竹富島だけにしかない「星砂」の浜へ行く。星の形をした砂（正確には有孔虫の化石であるが）のある浜である。真っ白い砂を掌にすくうと、なるほど普通の砂に混じって星形の砂が二つ三つある。以前はほとんど星砂だったのだが、皆が取って行ってしまい、今では非常に少なく

なってしまったのだそうである。星砂の採取は禁止らしいが幾つか持って帰る。部落に戻り付近をぶらついた。道の両側には石を積んだ石垣のヘイが並んでいる。石垣越しにつやのある葉を持つ福木がそびえ、あるいはたわわな房を持つバナナ、奇怪な気根を空中に垂らすガジュマル、真赤な花を一年中咲かせているハイビスカスが石垣越しに顔を見せ、その背後に沖縄独得の白い漆喰でつなぎ止められた赤瓦の屋根が見え、その屋根の上には例の魔除けの獅子（シーサー）が厳然と控えている。天には透き通るような紺青の空があり、真赤に燃えた太陽に白砂の道や庭がまぶしい。時に、竹富島特産のミンサーを織る単調な響きが聞こえてくる。実に素朴でのどかな美しい南国の小島である。

今度は西海岸へ出てみた。正面に、島のほとんどがジャングルだという西表島が見える。その左に面白い島を見つけた。立って見ると見えるのだが、すわると水平線に隠れてしまって見えなくなってしまう。非常に薄っぺらな島だ。聞くところによると、その島は「黒島」といい、そこもサンゴ礁が隆起して出来た島で、この竹富島より広いのだが最も高い所で海抜数mしかなく、井戸を堀っても海水が出るので近くの島から水を引いているという。海がプールのように透き通っている。熱帯魚が泳いでいる。このあたりの八重山群島一帯の海はサンゴ礁だらけで沖縄本島より更にすごい。海は青いものだという固定観念が一ぺんに吹っ飛んでしまう。この海は青くないのである。エメラルドグリー

ンをはじめ、その変幻きわまりない色彩の豊かさは言葉には尽くせない。その夜はこの島の民宿に泊まった。夕食に「泡盛」が出てオン・ザ・ロックで乾杯し、豊富な海の幸にちびちびつまみを打った。食後には、ここの民宿のおやじさんが蛇皮線（琉球三味線）を弾きながら自慢のノドを聞かせてくれた。「安里屋ユンタ」というこの竹富島の民謡を方言で、真っ黒に日焼けした顔をシワ寄せながら一所懸命歌う姿に、我々は聞きほれた。

明くる日石垣島へ戻り、愛車を組み、石垣島一周へと走り出した。暑い。海が綺麗だ。こうも沖縄へ来て綺麗な海を見せつけられては、泳がずして帰るのはもったいない。そこで、川平という所でヤシの生い茂る浜にキャンプを張り、翌日まる一日のんびりと泳ぐ事にした。時まだ3月である。

一日のんびり過ごしたその次の日は、巨大なガジュマル、緑したたる福木、天にそそり立つ野ヤシ、そしてヒルギ群落、マングローブの密林など、熱帯原生林やサンゴ礁の海を見ながら島を一周し、石垣港へ戻った。夕方船に乗って、翌朝那覇に戻り、沖縄の旅も終わりとなる。

思えば、沖縄の人達は多少言葉が荒っぽくてぎこちなく感じられるが、話しているうちに皆非常に親切で人情のある人達であるのがわかる。また、女のコは南沙織のように、髪が長く、小麦色に焼け、小さくて可愛いコが多い。そして、沖縄はやはり日本であった。行けたらまた行きたいと思う。星砂とサンゴ礁の海を求めて……。

鎌倉フリーラン

貝拾い

期日　昭和50年4月29日（天皇誕生日）

参加者　岩根　義彦　氏
藤原　亨　氏
野崎　信春　氏
金谷　健　氏
沢木　至　氏

コース　全く不明。

距離　約35km×2

天候　うす曇り

記録　沢木　至

丸子橋を渡るとすぐに道をまちがえてしまったらしい。おさに愚痴を言っているようであった。全く神奈川県の地理に弱い5人が、無事に鎌倉に着けるのであろうか。もっとも今回のフリーランは一年生の僕と金谷はゲストなので、途中のコースはおろか今回の目的さえ知らなかったから、残る藤原さん、岩根さん、野崎さんの聰明トリオへ当時は本気でそう思っていた。）にすべてをまかしていたのだった。それにしても、あの信号だらけで交通渋滞で排ガスが目にしみる道を黙々と走りに走り、交番に道を尋ねてみたり、地図を読み違えて、線路が右にあるとばかり思って走っていたら左に線路が現れたりと、鎌倉ごときに全く予想もしない悪戦苦闘を強いられたのであった。そして我々5人がそれにもめげず、ようやく鎌倉の

町に着くことができた時はもうお昼を過ぎていたようであった。この時の苦労が身にしみたのか藤原さんのフロントバッグには、夏合宿中も鎌倉の地図がついていたようである。

鎌倉丼などを食べた後、あの聡明トリオは浜へ貝拾いに、僕と金谷は大仏を見物に行った。僕らはお寺で「帰りは照事に東工大まで帰れますように」とお祈りしてから、浜に行き、「先輩たちはわざわざ鎌倉まで来て何ごこんなに熱心に貝を拾っているのでしょう」という素朴な疑問を持ちながらも、いっしょになってそはしゃぎまわった。まわりの女づれの男たちには目もくれず、いい年こいて男だけ5人が貝を拾っている姿は、はたの人たちにはどう見えたのでしょうか。

先輩たちは、未練の残るまなざしで海をみつめていたけれども帰ることになった。帰りは行きとくらべると驚く程順調に進んだが、横浜駅前まで来た時今回のツーリング唯一の事故が起こった。僕の乗っていた堀さんから借りた自転車のクランクの調子がおかしいのだ。なんと、コッターピンのナットがない。幸い藤原さんが予備を持っていたので直ったが、全く僕の無知というか無神経というか、そのために起こったことであった。その後無事に、快調なペースで東工大に到着し部室でビールによる打ち上げをして、僕と金谷にとっての初めてのツーリングを終えた。

ところで、今回のツーリングの目的は、『だから貝が鎌倉の浜にあるという某氏の噂を信じて、』だから貝を探すことであったようである。

5A-1

浅間高原ツーリング

5月2日～3日

参加者
小島史夫
原啓一
岩根泰彦（記録）

走行距離
約70Km～90Km
（ピッチ二者）

コース

5月2日
軽井沢駅
↓
中軽井沢駅
↓
峠茶屋
↓
分去茶屋
↓
鬼押し出し
↓

5月3日
↓
吾妻渓谷
↓
中之条駅
小島
↓
渋川駅

碓氷峠の勾配は急だ。信越本線で越え、軽井沢駅に着いたのは五月三日の朝。曇り。さっそく自転車の組み立てを始める。小島は新車なので慎重だ。正面の通りを短パン姿のサイクリストが風のようにやって来て去った。旧碓氷でも越えて来たのだろうか。

まず、線路沿いの道を中軽に向かって走る。道巾が広く走りやすい。中軽井沢駅に着き、スタンプを押して、今度は正面の道を浅間の方向へ向かう。自転車道が歩道の中にあるが、段差が多く走りづらい。自転車の交通規則には厳しいうるさく、何かの事で注意された記憶がある。サイクリングの盛んな町だけに、安全には心を配っているのだろう。まもなく雨が降り出し、道路わきの家の軒先を借りて雨宿りした。しかし、止みそうにない

ので出発。するとすぐ、自転車通行止めの表式だ。裏道が示してある。そこに入って最初のうちはまだ良かった。が、それからが思だ。急勾配・砂・じゃり……。「くそッ！」・グッ・ズズーッ・「ンッ！」・グッ・「ハーァ、ア」・ザッ・「畜生！」最初から説明する。「負けるものか。」と・足に力を入れた・でも車輪が砂の上で空回り・それでも腹に力を入れて・もう一度・今度はペダルが動かず、静止・ついた足を着いて・頭に来た。長い長い。どこまでも続く。やがて自動車の走る音が近くに聞こえるようになってきた。左手に見える山腹には雪が残っている。一休みして石を投げる。道路の向こう端のコンクリートの部分に乗せようと石を投げる。一つ、二つ、三つ……バラバラ。「一個ぐらい乗るだろ」。走り出すと、すぐ頂上の峠の茶屋だ。洗面に行き中軽に戻るというサイクリストの一団が来て、我々が迂回した自転車通行止めの道を下るという。「通れないでしょ。」と言うと、気にしないとのことだ。別に食い下がろうとは思わないが、あの苦しかった迂回路での一時が去来した。

昼食をとって国道一四六を下る。白根山が異様に青い。空は次第に晴れてきた。だいぶ下って、空も完全に晴れ上がったころ、分去茶屋付近で左折し、高級別荘地の中を走り、長い一直線の登り坂を越えて、鬼押し出しに着いた。原は一度来たことがあるというので、入場料がもったいないと言っている。鬼押し出しの溶岩は、昨年の春合宿で行った桜島のそれより黒くて細かい感じだ。溶

岩に囲まれた細い道をてくてく、てくてく。
浅間園の博物館まで歩いて登った。そしてブラブラ降りた。
さあーて、行くか。青く広い空。一筋のリボンの上を滑る。自転車はいい。
ユース到着。どういうわけか麻雀をする音が聞こえる。夕食前に、こわれたバトミントンの羽と、割れた竹の棒で野球をする。
もう日が暮れようとするころ、鐘の音が大きく響き渡った。飯なのだ。夜のミーティングは四〇名くらいで、楽しく歌をうたい、ゲームをした。
次の日は、たいへんな快晴。浅間が大きい。朝食をとり記念撮映して、きれいな補装路を下る。途中、浅間をバックにもう一枚。煙を吹いている。雄大さに圧倒される。さらに下れば、アッと言う間に吾妻渓谷だ。渓谷と吾妻線に沿った道を、スタンプを押しながら走る。僕は私用で、皆より少し早く帰らなければならない。中之条駅で自転車を分解して、原・小島と分かれる。彼らは渋川まで走るという。急行列車は、車体も終りとあって、まさにすし詰め。輪行袋をディレイラーの方を上向きに、縦にして置く。これからずっと、同じ姿勢で、東京まで帰るのだ。なんだか、パッとやって、パッと終ったフリーランだった。

〈オワリ〉

M E M O

新歓ラン

栗原和明

期日　6月1日

参加者・

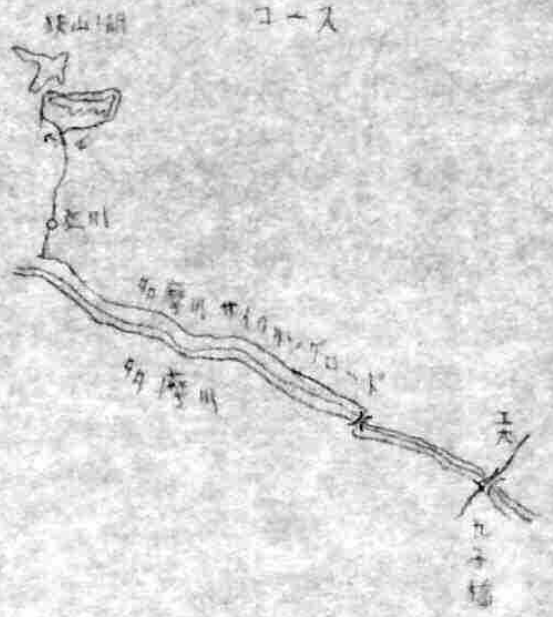
3年　堀　藤原

2年　野崎・横口

1年　金谷　栗原　沢木

鈴木　宮田　名取

コース



走行距離　90km　天気　晴→一時雨→雲

時間　10時間

サイクリング部に入って一カ月半、おれら一年生にとって、初めてのクラブラン。ボクにとってはじめてのサイクリングでもある。

朝9時、期待と不安を心に秘し、狭山湖を見ばしてスタートした。ボクの車は年前に購入したBSOHちゃを改造したボトルの赤がドギツク目立つボロ車。「みんないいのに乗ってるなぁ」と思いつつ、ひたすらペダルをふむ。サイクリングロードに入ると、自動車に注意を払う必要がなく、どこまでも平らな道を黙々と走る。"気分爽快"

途中、木和田峠の情の手で休憩中、ロマンスカーがわれわれの上を通過した時、なにかふってきた。「なんだ、なんだ」と、議論のあと、犬は犬の排泄物と判明。犬はだということで、がまんしたが、その後のある人の話によると、「ロマンスカ

ーでは、液体と固体を混合し撹拌したのちに
川の上を通過した時、流すのだ、とのこと。
ということは、さっきのあれはなんだ。しかし
ボクにはふってこなかったので気にすることも
ないのだ。

サイクリングロードから出ると当然のことながら
車が自動車がやかましい。昼食を終って、少
し走ると湖が見えた。そして湖畔（湖畔という
感じではなかった。）でひと休み。ジュンケ
ンで不運にも負けた横口さんと全員が買って
きてくれたアイスクリームを食べてから湖一
周へ。この道が舗装されてはいるがガタガタ。
脚はふるえ、オシリはいたいし、まいった。

帰りは、立川市内を通るころから空が暗く
なり、今にも雨が降りそうだったので、サイ
クリングロードに入ってしばらくしてから、先頭グループのかべ
しえとエげたのだ。ボクは必死についていく（死
にそう！）。もんとか橋の下で思に雨が降ってきた
ので、なんとか橋の下で雨宿り。寒くて震えて
いると、名駅がやっケを借してくれた。やっぱり名駅
こそ頼がいる。一時間しても雨はちょっと止みそ
うにない。堀さんと藤原さんがこの雨の中、買出
しに行って、パンとかソーセージを買ってきてくれ
た。この行為が雨隠りの神様を動かしたのか、パ
ンを食べているうちに雨がやんだ。

雨上がりの道を学校目ざして走り出す。その時
藤原さんが「あまりとばすなよ」と一言。この一
言で案外。私はきを立て、ひたすらこぐ。学校
についた時は、すでにあたりは暗くなっていた。
部室でオシリのいたみを感じながらビールを飲む。

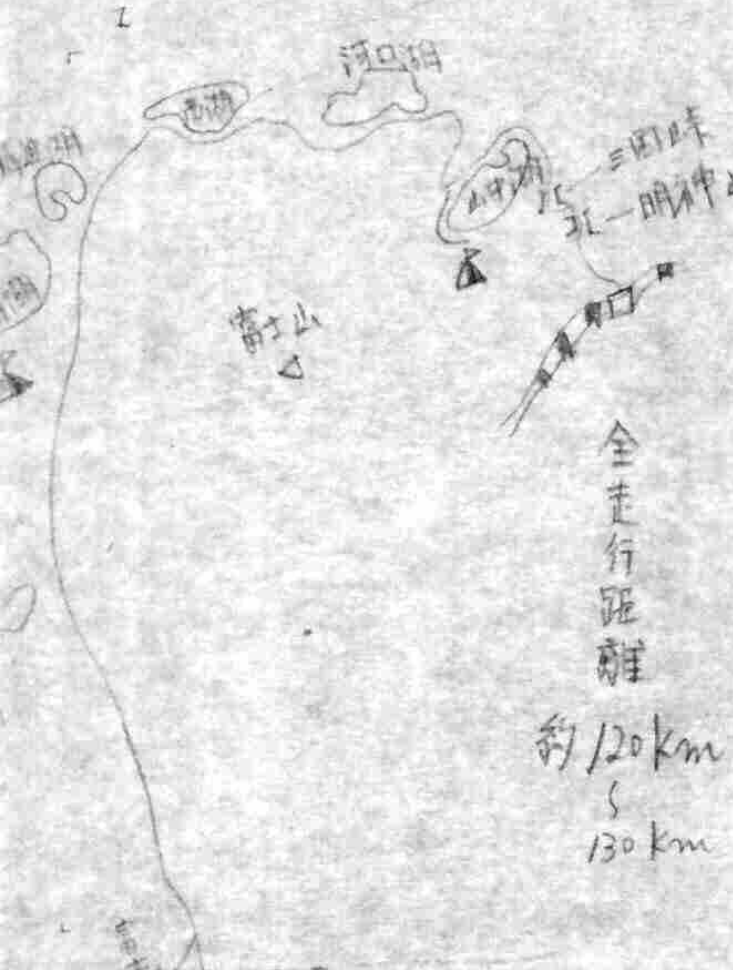
7A-1

初めての体験

1 昭和五十年度 準備合宿 1 名取

期日 7月17日～19日

参加者 堀(三年) 中村(三年) 野崎(三年) 松重(三年)
毛利(三年) 溝口(三年) 富田(二年) 金谷(二年)
沢木(二年) 宝谷(二年) 鈴木(二年)
栗原(二年) 名取(二年)



全走行距離
約120km～130km

一年生にとっては、初めての輪行キャンピング。十七日の朝六時五十分東京駅集合。僕は少々二日酔い。沢木君と西小山の駅で待合わせていたのだが、朝起きれず遅刻。幸にも東京駅に着いたのは集合時間前。前日やっとの事で、輪行袋に納めた自転車も行儀よくホームの片隅におちついている。ふと横の富田君の輪行袋を見るとこれはひどい。彼言わく「朝、目黒の駅前で分解したので、十分時間がなかったのだ。」「そろそろ、みんな集まる、だが！」と部長の源さん。そうはもっこいい、金谷君がいないのである。電車はホームに入り、ヨもなく出発だというのに。結局金谷君は、おいて行こうとみんな電車に乗り、ヨもなく電車はホームを離れたのだが、金谷君はしぶとい、なんと言うしぶとさだ。電車に乗っているではない」

る」か。金谷君言わく「電車発車寸前に乗ったため、
たの」電車は僕たちを乗せ、目的地に向かい
走っている。途中田子津で東海道線から御殿
場線に乗り換えて駿河小山で下車した。駅前
でみんなそろって自転車を組み立てた。ここ
で思わぬハプニング。なんと僕はチャリ丁の
とわねじをねじりわすれてしまったのだ。と
なりたいた塚部長さんが、心配そうに見てく
れたが、わしのかれ端は、わしの穴に入って
しまって外に出てくれない。そこへ世紀の使
者冨田君が現れ、器用にも、ねじの残骸を、
わし穴から取ってくれたのである。しかも、
冨田君愛用のダルマを借してくれ、やっとう
事で僕は自転車を組立てる事が出来た。（ち
「う時のダルマは、まだだいじに僕が保管して」

「いるので冨田君心配なく。」

さっそうと十三台の自転車は列をなして走り初
めた。途中トライアインで昼食を取り、河口湖に
向かってまた走り出した。後から考えると、この
ころは幸せであった。後に恐怖の明神、三国峠
がひかえているとは知らず・・・・・。道中富士山
周辺で記念撮映をしてまた走り出す。"さあー
これから峠に出戦。"などと言う気持ちは全然なく
第一これから峠をとるのだなとは全然知らなか
ったのだ。最初はアスファルトのとりでしたが、
そのアスファルトが終わるとカタカタ道。一生懸
命ペダルをふむのですが、なかなか前に進みヨせ
ん。太ももが割れるように痛くなってしまいました
自転車から降りてしまいました。根性がなかった
「なあー」あのカーブを曲がればきっと峠はあ」

「まいったなあ」と確信して、再度自転車に乗りました。

「やにこの悪路を呪うような口調で、愚痴をこぼしていたが、しばらく休むと四人はまた自転車に乗りました。

7A-2

したが、二三回クランクを回しただけで、また推却。やっとの事でカーブ地点にたどりついてが、くり。またまた峠は続いているでは、なかなか前に進みません。上り道に加え、路面状態が悪く、力を入れても、スリップしてしまうのです。それでも四人は、執念深く、僕からみると、ペダルをこぐのです。僕は、相変らず自転車を押しています。しばらく行ったカーブ地点で大休止をする事になりやっと安心。みな無事にその地点に到着し、口々に道路の悪口を言う。悪口を言う事で疲れをいやしているかのようだった。それと同時に、あと少しでこの峠も終るだろうと確信し、渓望し、体を休めていたのです。

ありませんか。僕の横を走っている溝口さんの表情は、なんとも言いがたく、非常にたいへんなようだったので、僕は自転車からおりて、自転車をおす事に決めました。溝口さんは、二、三度こぎ地に足をつけ、また二、三度こぎ足をつきそしまう動作を繰り返していたのであります。そんな溝口さんを横に見ながら、第の悪路を感じつつ、自転車を押しました。しばらくして直線のようが前方に伸び先を走る四人（頂さん、野崎さん、毛利さん、沢木君）が視界の中に入ってきました。

ところが実際は、ここまでの距離は峠のほんの一部にすぎなかったのです。そんな事とは、つゆ知

「さて、再度自転車にまたがり出発。最初のピッチ位

4

「は　自転車に乗っていたのですか　またも？」

自転車を押す事に決定。いけども、いけども峠終らず。あのガーブを曲がればきっと峠も終るだろうとそればかり考えながら、前を走る野崎さんに（不思議ッ！この時僕は二番目を走っていや押っているのです。）「まだ峠につきませんか。」と一種のかけ声をかけつつ自転車を押してゆきました。上着は、汗でつけものみたいにぐっしょりと塩からくなって、非常に重くこれはそれはつらいばかりの時でした。何度目かの僕のかけ声に対する野崎さんの返事は、並々ならぬ響もって僕の耳に入ってきました。

"峠についたぞ！"

「僕は動かぬ足を叱咤して自転車を追った。

「"ついた！"と思いしや何んとそこは明神峠でありこれから三国峠を目差さねばならぬと言う。

"がっくり！"

明神峠で大休止。ここで異様と思われる物を目にした。バスの停留所である。バスが休日に限り一本通るのだそうだ、この道を？　このバス時刻表の前で記念撮映。三国峠目差して出発。というも僕は相変らず自転車を押すのである。いくらあせっても峠の頂上にはつかず、足の方は惰性で動いているまう有物である、前を走る野崎さんの姿も見えず、後に来るはずの仲間も見えず、孤独な自転車押しはただ一人。つらさを忘れるために前方を見るのをやめ、ただ足もとの地面を見て押す事にした。やっとの事で峠の頂上についた。野崎さんと"つらかったなあ！"と思わず言いました。」

ぶりの来るのを待っていた。野崎さんは、頂上」

3

4 ―3 前のめり値を押しただけで（すごいサル道

5 で自転車で来る事は不可能と思われる）あと

全部自転車に乗ってこうにきった。自転車を

引摺る物であるのに、いとも。ふとみんな到

着！とにかくのんびりからから、疲労困ぱい

の状態で、食み物の自動販売機のある所まで

走ろうと、前とは打って変ってなだらかな下り坂を快

適に乗って走った。この日は河口湖まで行く

予定であったが、時間的にも、疲労度がこい

ので無理であり山中湖でキャンプする事に

決定。キャンプ場につき、さっそく食事の用

意に取りかかった。ここでまた僕にハプニン

グ。生死を決する食器を忘れて来てしまった

5 「ウ、ウ、幸いにも、浜木君に食器を借してもら」

「い、名コックは村さんの作った肉入り野菜いため」

を食べ、静かな眠りについたと思われたのだが、

僕の横に寝た浜木君の歯ぎしりと寝相の悪さに、

じゃまされ僕だけはなかなかねつけなかった。（二日

目の夜も浜木君にはまいるのだが。なにしろ僕の

腹をまくらにして寝るのだから）

二日目は、山中湖から本栖湖まで走った。朝

さっそくキャンプ場をあとに忍野八海に向かった

。昨日とは、打って変ってのどかな道、空はすみ

すみまで晴れ渡りなんとも気持ちのよい日であ

った。八海に着いて、地から湧きでる冷水で顔を

洗い、八海をながめた。横を通ぎる青々とした稲

が、夏の光の中でまぶしく見え、走っている僕の

心も洗い清められてゆくような、

「日でおわった。河口湖に向う途中 全員でもれなく」

6

「いいとこうとカリエケへ緑（銀）のほ息地に」

立てより、管理人のおばさんの名口調の説明に耳を傾け、また走り出した。交通量の激しい国道は危いと言う堀部長の提案により地道を走る事になったのだが、これが裏目に出て僕の後輪がみごとパンク。野崎さん、毛利さんの指導をあおぎ、初めてのパンク修理、パンク修理も終わり河口湖に向かって走り出す。河口湖で高い昼食を取り、湖畔で休憩。僕は、ニミが細れて居る。観光用の馬の研究。「ね、また出ーたぞ、ここまりたさいの」

「大つも？」

十三名のライダーは、さっきうと自転車にまたがり出発。この時、まちがいが起きた。

「富田君を先頭にした事だ。後を走る毛利さん」

「野崎さん、宝谷君と、「おい、先頭はどこまで」ていろんだっいくら走ってもおいつかないー」

と語り合いながら、つっ走る。富田君の速い事、平たん、もしくは下り坂にかけての富田君の速さにはついる。（上り坂以外は富田君を先頭にする）

西湖に沿う地道を走る十三台の自転車。途中こうもり穴に立ちよる事にしたが、中学の団体が僕らより先に入ってしまい見学するのをあきらめまた走り出したのだが、ここでまた僕にハプニング。自分の自転車のみぎの番号を忘れてしまったのだ。やっと思い出した時には、もう誰もいない。さて、どっちの道を行ったのだろうか、やっとの事で仲間を見つけた時には、仲間はすかすかし「顔をして一休みは、こっちの気持ちも知らないで」

「で、いよいよ。さあ、出発という時になってまた
たまたまかこんな。金谷君が突然「河口湖へ
帰る。」と言い出したのだ。金谷君は、日ん
とうにおかしなやつだ。河口湖で言えばいい
のにこんな所で。自転車は精進湖を横に見な
がら、今夜のキャンプ地本栖湖へと向った。
キャンプ場に到着するとさっそく食事の用意
今晩の料理はカレーライス。肉が少々でタマ
ネギばかりのカレーライスであったが、腹が
減っていたせいかうまかった。特にもりさん
が指をつっこんで味見したあのカレーはうま
かった。食事も終り、湖畔で酒を飲みながら
花火大会をしたいや花火見物をした。隣の
グループがうちあげる花火をみんなで見
物。湖畔からキャンプ場へ帰ってきてからの」

「一こま。
誰かまわく「名取がみんな前で小便してるぞ。」
名取代言わく「小便もしたくないいい男！」
堀部長言わく「かえるに小便をひっかけられた
ような顔をして。」
みんなテントに入り隣にキャンプしているバカ
騒ぎの好きなグループの春歌をこもり歌に深い眠
につく。
つぎとつ出たホイのこさホイのホイ・・・。
最初日は表富士周遊道路を走る予定であったが
中止。これもみんな初日の時のせいである。場を
みると体が拒絶反応を起こすのだから。結局一番
軟弱な下りのみと言ってさいい国道139号線を富士ま
で走る事にした。（あー、恥かしい。）
「みんなは気くーした顔で走っている。下りに感

「富田君、富田君に負けずと中村さん、中村」さんと言う人はおもしろい人で休憩になるとみんなビールを飲むのである。中村さんはカンビール無しでは走れないのかな。鈴木君も栗原君も元気はつらつ。途中田貫湖により、下りっぱなしの道を走り続けた。（田貫湖に着く前に宝谷君は、ある事をしたのだが、それはヒミツ。）

白糸の滝の所で富田君は私用により富士宮に直行。残りの者は白糸の滝を見物した。一行は白糸の滝を後にして、名も知らぬ風穴見物へと急いだのだが、目あての風穴がどこにあるのか全然わからず、最後には、まるもう案内で風穴にたどり着いたのだが、期待はずれの物とわかり、さっさく風穴から脱出、近

「だ松重さんおけは、「探検しようよ」と言い乱暴に立って左の奥深く入ろうとした。きっと松重さんは穴の探検が好きなんだろう。

あとはもう富士見ヶ丘まるだけ。心は全員富士の駅に着き、東京行きの電車に乗った。電車の中で一人だけしかめっつらをしている人がいた。その人は、合宿中ずっとこんなで走ったため、肩が日に焼け非常にヒリヒリしているらしく、輪行袋もかつげずくしゃいそうだった。その人は わかりこんぐ部部長、堀忠一さんでありました。それにしては 僕も合宿中ずっとこんなで走っていたのに、たいしていたくないのは どうしてだろうか。やっぱ育ちのせいかな。

PA-1

夏合宿

津軽・十和田・男鹿コース

期日　S50.8.15～S50.8.28

参加者　杉浦元幸(4)　リーダー

藤原亨(3)　途中参加

毛利亮一郎(2)　会計

小柳秀樹(2)　医療

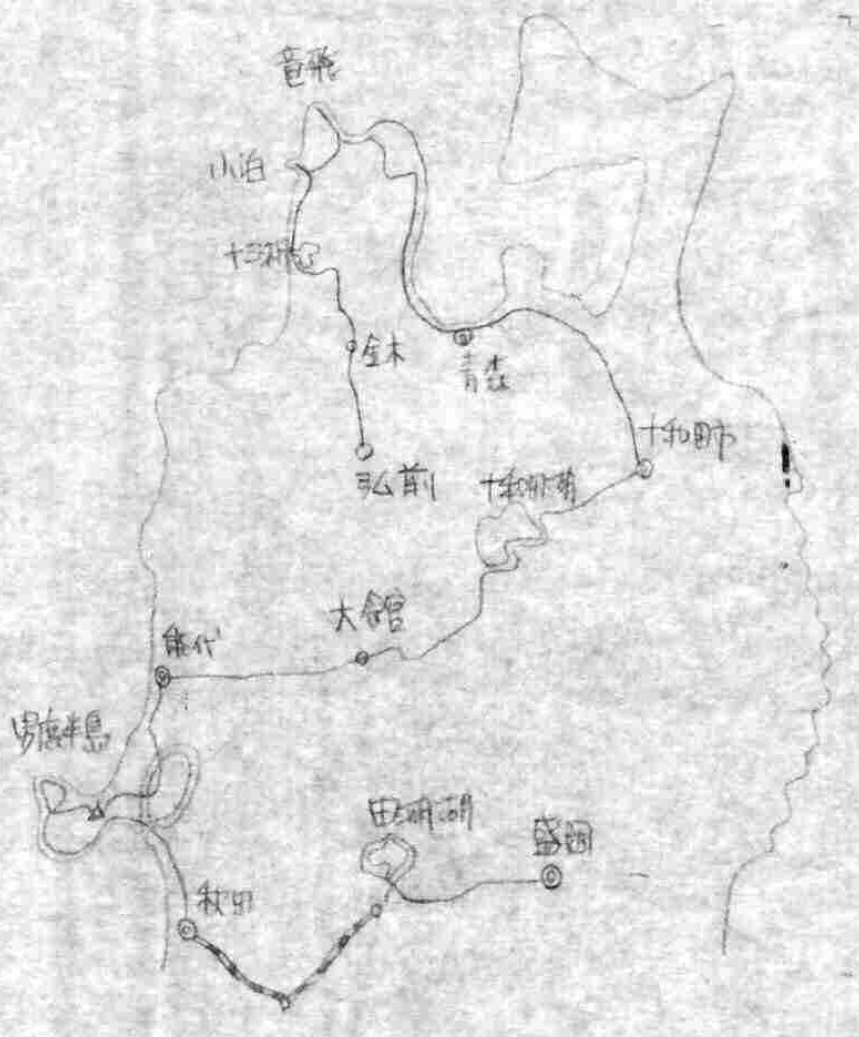
鈴木俊明(1)　雑用

宝谷一夫(1)　書記

コース　弘前－金木－小泊－竜飛－青森－十和田市－十和田湖－大館－能代－男鹿半島－秋田－田沢湖－盛岡

全走行キロ　約600km

記録　宝谷一夫



合宿のレポートというものは帰って来てからすぐ書くものであるはずなのに　これを書いているのは　なんと春合宿から　ずいぶん経ってからの後なのである。かなり忘れかけている記憶をたぐりよせながらなんとか書くことはできるだろうか。……（一人言）

第一日目　出発の日の一週間位前であった。だろうか。東北地方は豪雨のため　奥羽本線が不通になってしまい　予定していた急行に乗れず　青森まで行くことになった。七時の夜行に乗るのに4時間近くあるので　そしていざ乗ってみると加子加子　臨時にしては座席もよく冷房まできいていた。たまたま他の班と同じ電車になったのでトランプなどをやったりして時間をつぶした。ボーカルの請けをしてお姉さんと飲不かずもつけたらしい。

第二日目　夜行でまったく眠れず　朝六時に青森についた。荷物を受け取り　弘前まで各駅で行った。車中での地元の人の会話などまるでいがらす　外国語の様である。これはなやまされそうと思った。弘前に着いたのは朝の11時。朝食を駅前で食べ　自転車を組み立て始めたが眠くて眠くてたまらず　出発したのは十一時頃だった。弘前城で高一のサイクリストに会った。彼の話では岩木山が近の為不通とのこと。彼等は弘前大の生協で昼食を取り　日陰で昼寝と決め込み　約一時間たっぷり休息した。この日はそんな訳で五所川原までしか走れず　巷謡老人ホームの前の公園にテントを張った。夜は蚊になやまされた。　走行キョリ 30 km

第二日目　朝日をさますとそこら中かゆくてテントの内側には蚊がぶくっとふくれた蚊が張ぺすにぶるさがっていた。この辺の蚊にさされるとムヒをぬってもなおらず　赤くぶくれて最後までなやまされた。テントのそばに置いておいてパーを大にかじられたが　その他の物は無事であった。老人ホームの人に礼を言って　ガムをもらって出発。天候はくもり。北上して金木町に到着。太宰

が生ぶれた 剣陽館を横目で見ながら あしの
PA－2 公園で大休止。このあたりから小雨がポツポ
ツ降り初めた 秋 そのまま北上して高松から
国道339を左折して十三湖へ向った。田んぼの
中の一本道が長く続いており 田んぼのりき
には雁がさしてありとういう訳かその横に長
ぐつがつきさしてあった。鈴木はあの長ぐつ
をはいて田んぼに入るのかなと言っていた
が彼はかかしのかわりだと言ってくだらん議
論をした。昼に十三湖に着き付近のドライブ
インで昼食をとっていたら大雨になってしま
い、一時間ばかり休んで いやみになったと
ころでヤッケを着て出発。木の橋を渡って小
泊をめざし再び北上。小泊に着いたのは午後
二時半頃だった。ニュースでは台風が近づい
ているらしく雨になるかもしれない。竜飛まで行くにはもう一度もどって回り道をしなければならないので明日竜飛に行こうと考えたが定期船はなく 船をチャーターせねばならず 自分と値段のうわ高くなり 結局船には乗らず近くにとまる所はないかとあちこちしていた。寺に行ってみたが 民宿をやっていて満員ですとことわられた。公園らしい所もなく 公番に尋ねたら民宿を紹介してくれて 宿泊二千五百円で民宿にとまることにした。おさしびりに風呂に入り 洗たくもついでにした。

走行キロ 53km

第三日目 心配していた台風はどういう訳かこなくて 天候は曇時々小雨。公番に竜飛へ行く道はないか尋ねに行くと 小泊と三厩

を結び増沼林道が近道だと教わり その林道にチャレンジしてみた。はじめは田んぼの中のあぜ道みたいな所を走り段々勾配もきつくなってくる。やけに後の荷物が重く感じる。三十分走って休憩。また少し走って休憩。勾配はきつく ジャリ道ときているもんだからもうぐったり。毛利さんと杉浦さんが先頭でおくれて小柳さん鈴木そしてボク。イニナートおとしてもなおキツイ。ついに押しが始まったが運よく頂上にやっとたどりつけた。ホトんの水はカラッポ 幸にも標識があるだけもう昼はすぎ 一時半頃 途中の沢の水で茶をわかして飲んだ。とてもうまかった。下りになったとたん 杉浦さんの自転車がパンク。予備チューブをもっていたのですぐ修理で きたが なんと遅れて 再びパンク 今度はひとつ二ケ所穴をあけたら ふさぎきれずくやり直し 再び修理して、いざ空気を入れたら 空気が入らない。よく調べたらもう二ケ所穴があいていた。結局 修理するのに一時間半近くかかり その間に鈴木と小柳さんは先に下ってしまい 毛利さんは金けで転倒 ドアーブリッジがはずれず 手とすりむき バレーキベーをひんまげ ビーテープはスラスタにしてしまった。なんとか林道を下り終るともう四時近く。近くの店でパンを食い急いで本日の眠倉と食料を見つけなければならない。店屋は酒屋と雑貨屋ばかり。雨も降りだし最悪 すると三厩本町会館とかいてある会員館を見つけ 管理人の酒屋の佐藤さんにたのみ一晩 とめてもらうことにした。杉浦さんが食料を買いに入ったが 帰ってきた時は。ウスト状

四人ついて来た。なんと行くとき同じだった
A－3 藤原、野村、富田、望月（さんぬかしてゴメンネ富田は
8いいと）達である。彼等はてまるあてがなく
こまっていたらしかった。合計十人となりた。
んとなくニギヤカになった。今日のこん立て
はオムレツと野菜サラダとみそ汁。さし入れ
キョウリ10本。　走行キョリ26km
第四日目　朝から天候はよくない。しかし
それにもめげず　荷物を公民館において竜飛
まで往復した。道は水たまりが多いため前走
者に追つくと顔にまで泥水をかけられてしま
う。竜飛からの帰り下り坂でスピードを出し
すぎ右カーブでハンドルを切れず、鈴木氏は
草村の中へ転倒。幸い怪我をなかった。公民
館で朝食をすませ　B・D班合同で出発した。

三厩から今別まで R280 を走り　今別から大平
経由で蟹田まで県道を通った。B班とは大平
で別れ彼らは小泊へ向った。蟹田で近い店を
探せないでいるとき雨が本降りになって来た。
やみそうにないので雨中をヤッケを着てカム
シャフに走った。R280 をひたすら南下し奥内
まで走り　雨もやんだので公園でテントを張
った。メニューはハンバーグとみそ汁とトマ
ト。食器を洗っていて「ブキンかないなんな人
で誘していたら近くのおじさんが来て「このフ
キンつかいな」といってくれたのには驚いた。
走行キョリ70km
第五日目　朝小雨が降っていたらしくテン
トがしめっていた。今日も空はどんより曇っ
ている。朝食を食べていると　近所のおばさ

んが僕等の朝食のあまりの貧弱さにみかねて
か おにぎり4コとモロコシ6本を差し入れ
してくれた。おばさんの話は方言でひじょう
にききとりにくく ハイハイと相づちばかり
うっていた。おばさん曰く「うちの息子がいた
ら通訳してくれるんだが。」これも方言でいうと?。
またも天候を気にして出発。R80で青森まで南
下し、市内でニョッピングをした。おこべは残
念ながら買えなかった。青森県とは日本一周
とかいてある自転車がおいてあった。つん着
情でホトんが2本 重量は四五十キロあった
のではないか。近くの公園で昼を食べわっく
りと休息した。その後R4で浅虫まで行き、
テント場があるはずだったが、見つからず水
族館見物のあと テントをはれるところをさ
がしながら浅虫中学校に泊ろうと決めた。職
員室でお茶をのみながら先生と話をして夜の
すみを張らせてもらうことにした。温泉へ入
りに行ってるうちに雨が降り出し降ってくる
とテントはびしょびしょ。しかたなく玄関で
眠かせてもらった。走行キョリ 30km

第五日目 今日は出発式なので 朝食もく
わずに六時半に中学校を出発した。浅虫の駅
でパンと牛乳を買い朝食とした。今日の夜に
は藤原さんが加わる予定である。朝七時半頃
駅を出発してR4をひたすら走った。R4号
はひじょうに幅が広く車数も多い。またわさ
な丘をのぼりおりしている。かなりのハイペ
ースで走ったため昼食予定地の野辺地に十時
半頃ついてしまった。駅には東洋大サイクリ
ング部の団体が自転車を組み立てていた。彼
等の人数は なんと 20数名 うち女子1名位の。

8A-4

テント用品はもっていたが二日宿を予約しているとのこと。駅でやぶんにお茶をかりしたり フライパンやなべをも。ているのには驚いた。せるがいると食事が楽だろうなあ。彼等と別れて一路七戸をめざしてペダルを踏んだ。七戸には正午すぎに着き ここで昼食をとり 七戸の駅で昼眠をした。七戸を出発したのは三時頃。十和田市にはすぐついた。駅前の案内図で公園を探し まずは公園へテント張りに行った。公園付近で僕の自転車の後輪がパンク。初修理にやし時間がかかったがなんとかうまく直せた。テントの中に荷物をおいて藤原氏を出向いに再び駅へ。六時頃藤原さんが到着。歓迎をかねて 外食と求まり駅付近の食堂へ行った。いままでテントには2人と3人で眠っていたので2人の方はゆったりしていたが今日から3人3人だ。藤原さんはさっそくテントの中でたてにねることを主張し自分は中央に陣取ってしまった。すると いなあと。 走行キロ 54km

第七日目 浅虫でとまったときの大雨で岩木山付近や十和田湖付近の道が不通になっていたが どうやら通れるようになったらしい。朝は近くのパン屋で朝めしをくい、R102で十和田湖へ向った。焼山までは大した登りもなく楽につけた。焼山からの奥入瀬ラインはとても景色がよく登りの疲れさを感じさせない。二日前の雨のためか道の片方が川になっている所もあった。水量が多いためかにごっていたのが残念だ、きのう。ぜひ晴れるとすばらしいとてもすばらしい。

十和田湖に昼頃到着した。近辺のみやげ屋で昼食を取り、その後自転車を置いて二女の像（おばちゃんの像）を見にいった。さすがに観光地だけあってものすごい人人人。自転車にもどった頃雨が降り出し、ラジオでは再び台風が接近してきていることを言っている。やんでから今日の目的地休屋をめざしてまりはじめると以外な登り坂が出現　すぐ終るだろうと思っていたらなかなかおわらない。イライラしながらもやっとのことで坂上についた。ここが魔の瞰湖台。景色はいい所だがあいにく雨のため霧でなにもとかすんでいた。休屋まで便通にくだり　食料を買い　キャンプ場へいってみた。が無情にも雨がつよく降り出しキャンプ場の管理人に「この前の大雨でテントが〇個流されましてね」なんて言われたもんだからしょうがなくYHにとまろうとしたが満員。となりの旅館に泊まった。

走行キョリ 55km

第八日目　昨夜は雨なんかしてやっと降ってはなくしかし空はどんより曇っている。休憩キ頃発荷峠を出発し、今日のメインエベントの発荷峠に挑戦。藤原さんは登りになるとあっという間にぬけ出してすぐ見えなくなってしまう。上を見上げるとガスがかかった道が続き　先の方に藤原さんが走っている。僕は最後尾でゆっくりインナーにおとしてしまった。ゆっくりペイクはいいなと思う。発荷峠で休憩した後　下りがまちかまえている。一気にこがずに十和田南まで行けた。ここで昼食を取り再び出発　東北道を経由して鷹巣まで走った。雨にっくと雨が降り出し　今晩の宿

8A-5

はどうしようかと考え一時は断念ですこ
そうなんて案も出たが、公番に尋ねにいった
ら後会を紹介してくれた。ここの牧師さんが
とても親切で、皆くなりコーラで歓迎してく
れるし、畳の室をかしてくれるし、ガス、料
理場までなしてくれ、風呂までとうそとも言っ
てくれた。夜のメニューはジンギスカンとシャ
ケのみそ汁。夜は畳の上に座ぶとんをひきシ
ュラフでねた。　走行キロ80km

第七日目。台風がついに通過し、空は青
快晴。行きしなにシャケとなすをもらい、記
念写真をとってお別れ。RTを能代へ向って出
発。能代までのRTはひじょうに単調でおも
しろくなかった。能代からさらにRTで南下
し木曲で昼食をとった後、八郎潟のまっすぐ
続く道を快調に飛ばした。今日のハイライト
である鳥海山にのぼる前に、すこし飛ばしす
ぎてはパテを抜き、三時半頃登りはじめ、355m
の頂上までいっきに登った。頂上は360度展望
で天気もよかったため絶景だった。頂上から
少し下った所の茶屋で杉浦さんがうで時計を
なくしショックのためか気分すぐれず。頂上
で時間を使いすぎ、あわてて下山すると海岸
線のアップダウンにつらいキーキーまいった。
空が暗くなりかけた頃、やっと女潟につき近
くの公園にテントを張り外食ですました。
走行キロ100km

第十日目　朝食の時、パンにコンデンスミ
ルクをつけてたべたが2缶も買ったのであま
ってしまった。するとM柳さんがあの甘いミ

ルクをそのまま(ぎゅうすぬ)飲んでしまうのである。すかさず恐怖のミルク人間という名がついてしまった。あいにく公園に便所がなかったため藤原氏、毛利氏、小柳氏は車道で用をたした。僕らは途中のガソリンスタンドで便所を借りた。今日は晴天。北海から有料道路を通り入道崎へ向った。途中で見える日本海は東にまれいで言うことなし。しかし道は10%登り坂がいろんな所にありつかれた。入道崎で秋田大のサイクリング部に出あった。彼らはユニホームをそろえてさっそうと僕たちをぬいていった。ここで昼食をたべ財台で記念写真を取り再び出発。途中で今日二つ目の有料道路 大桜橋有料道路に挑戦。入口からすぐ登り。アップダウンがきつく 景色は最高。午後4時頃男鹿温泉に着いた。近くの公園でテントを張り今日も外食。

第十一日目　走行キョリ 40km

前日からのつかれがたたって起床が9時半。出発が11時ときちゃくちゃ。今日の目的地は秋田まで。だがR7号は車数が多くまったくつまらない。何も見るところがなくひたすらペダルをこいで秋田に到着。秋田の武をちょっと見に行ったら一人のサイクリストに出会った。たしか東京の人だと思ったが。この日は秋田大の登明寮に泊まった。まったくひどい所で床がみしみし音をたてていた。本日が最後の料理日だったので藤原氏お得意のビーマンの肉づめがでて腹ははちきれそうだった。小柳氏はじんましんのため残念ながら(幸運にも)この ビーマンの肉づめは食べなかった。

走行キョリ 40km

8A-6

第十二日目

秋田大の原生れ時頃出発し秋田駅で朝食を含へた。秋田駅で支度・個人装備を整り 輪行して田沢湖駅まで行くことにした。荷作りに時間かかり秋田駅を出たのは午後1時頃。田沢湖駅についたのは三時前だった。再び自転車を組み立て フロントバックだけでそう快に田沢湖畔を走った。そしてYHに五時に着きひと安心。ここの所はバイキング方式と聞いていたので楽しみにしていたが女子が意外によくたべるのでそう多くは食べられずめしばかりに気をとられていたらフルーツがいいのがすくなくなってしまった。夜は外でキャンプファイアーをして 杉浦さんが女子トオズをした。

走行キロ 10数km

第十三日目、YHを朝九時に出発し一たん田沢湖駅まで十とり后宿のハイライトである国見峠にアタック。峠がつ山の方をみるとかりくずしが高い所に見え自動車が走っている。これをみるとはじめから加ッ力りときてしまう。いきなり急な上り坂が続き何度何度かずっとつづく。僕だけとりのこされ イニナーたおとしてゆっくり登った。道中から勾配がゆるやかになりいつの間にか峠についた。峠で記念写真を撮りごう作なダウンヒルをたのしんでいると前方の店屋にきたない自転車が五台並んでいるではないか。ここでA班に出会うとは。日比野さんはフリーのうたをはずしてこまっていたかも知さんが用意よくペアリーグ

の班をもっていたので修理ができた。A班と合流して十二人位の大団体で出発。車石で昼食を取り盛岡までいっきに走った。駅にいくすでに坂さんたちの班が着いていた。浜木が一人そばを食いすぎたとわめいていた。盛岡の駅から1km位の所の旅館に全員とまった。夜はビアガーデンに打ち上げパーティをしにいった。ここに夏合宿の幕を下したのであります。事故はほとんどなく永敏さんが下りでスリップしてすりむき途中で帰ったらしいがたいしたことはなかった。名取氏は出発前の荷作りの時に怪我をして不参加。その他はみな元気に合宿を終えた。　走行キョリ 64km

才十四日目　朝七時の待合で帰った人もいたが他はみな夜行で帰るらしく山岩農場へ行くことになった。俺と鮫木と栗原は先に出発して牧場でプロリ牛乳をのみアイスクリームをたべ休んだ。俺たち3人は午後三時の急行いわて2号で帰り　他の連中は夜行で帰ったらしい。駅で列車をまっていると鷹倉さんもいっしょになり千人で帰った。上野には十時頃ついた。

走行キョリ 50km

RB-1

夏合宿

―下北・十和田・三陸―

。期日

8月15日～8月28日（14日間）

。参加者

。堀　恵一氏（三年）

。小島　史夫氏（三年）

。永瀬　悟氏（三年）

。原　啓一氏（三年）

。松重　隆氏（三年）

。栗原　和明氏（二年）

。沢木　至氏（二年）

以上　七名

。第1日　8月15日

大湊駅で自転車を組み荷物の割りあてなどの後、駅前で昼食、午前11時40分に待望の夏合宿がスタートした。いきなりの砂利の登りを恐山へと向かう。実に最初から苦しい。恐山は、ちっともおもしろくなかった。薬研温泉へ向かって出発したが、これが信じられない砂利道、登りもすごいが下りで疲れて休んでしまう。しかし松重さんと栗原が来ない。ジリジリして待ちに待ち、日が暮れそうになったので、二人を見捨てようとした時に現れた。ただのパンクだが、今合宿の事故第1号であった。夜は外食　テントで寝る。

走行距離　29 Km。

。第2日　8月16日

8時30分出発。この日は朝からビュンビュン走

りきくる。11時までに42km走り本州最北端の大間岬に着く。ここでのんびりしたが、あまり最北端という特別な雰囲気はない。佐井から船で仏ケ浦を通り脇野沢まで行く。仏ケ浦は、何故か眠かったのでよくみなかったけれど、きっといい景色だったのかな？ 脇野沢で民宿に泊まる。ちょうど夏祭りで、久しぶりに祭りの気分を味わった。この晩から寝る場所をとる争いが激しくなる。何故だろう？

走行距離 55km

・第3日 8月17日

9時5分出発。民宿の人に見送られて気分が良い。海岸沿いに大湊まで走り、2日前にスタートした駅でスイカを食べる。田名部まで走って昼食をとっていると雨が降り出す。非常食を買い(雅さんはカワイイ帽子を買った)小雨の中を出発すると、野崎さんと偶然にも会う。他の人はと聞くと、広瀬さんは腹をこわし(ないし)、富田は自転車屋にいるとのこと。そこで、自転車屋でワイワイやって出発が遅れ、2時に出発、4時までに35kmを走り、老部でキャンプ、初めての自炊(内野菜いため)夜は浜で飲み、焚火を見て歌った。キャンプらしいキャンプだった。

走行距離 77km.

・第4日 8月18日

この日もグズついた天気。9時30分出発、太平洋岸を南下する。一部が砂利で走りにくいなあといいながらも午前中で35km。小川原湖に着くがそのきたないこと。がっかりする。昼食後、小川原湖のそばで、昼寝をしてる時に雨が降り出した。

あれてて逃げる。結局、雨の中を三沢まで走る。テントは無理ということで宿を探す。一P番汚い旅館で一泊める自信がない」と断われ、別の旅館を紹介してもらう。そこで、永瀬さんが何やらうまく旅館をだましずいぶん安くしてもらう。

走行距離 64km。

・第5日 8月19日

9時30分出発。今日はいよいよ十和田湖へと向かう。川に沿った道は楽で、小島さんのハイペースで予想外に早く焼山へと着く。あまり早く着いたので、のんびりと奥入瀬を走る。どんよりと濁った水もまた美しく見える。子の口から宇樹部へ行こうとして、歩道から車道への段を降りるその時、ピーンという快音と共に小島さんのスポークが折れる。今後、この音が何度も何度も鳴ることになる。そして、キャンプ場の中にはいってから、ブシューという音と共に、今度は松重さんのパンク。うそのように華麗なパンクであった。この日は中華丼を作り、夜は、湖岸の砂浜で寝場所を決める恒例の暗殺闘争をやって寝る。

走行距離 59km.

・第6日 8月20日

一夜明ければ集中豪雨。信じられない雨が降る。自転車は倒れ、テントはグショグショ。ゆうべトランプをやった所は湖の底である。とにかく水の上がっていないテントに7人集まり、しばらくトランプなどする。ラジオによると、十和田湖地方は記録的な大雨だそうで、非常事態になってし

まう。とにかくテントは危険なので、あいているバンガローに逃げ込む。しかし、キャンプ場の管理人と掘さんがののしりあった結果正式にバンガローを借りる。ショックだったのは、大雨で断水になったこと。しかたないので外食。

走行距離　0 km。

・第7日　8月21日

まだ走り出す気にならないので、午後から十和田湖を遊覧船に乗って見物する。あしたは絶対に走ろうということで、荷物をまとめたりしてまたバンガローに泊まる。

走行距離　0 km

・第8日　8月22日

8時50分、居居した十和田湖を出発。宇樹部からハ戸へと向かう。しばらく走ってないのに砂利の登りは辛かった。蛍ケ平で休んだ後、キリストの墓を見ようと、新郷村へ下る。下り始めて15分、永瀬さんが砂の浮いたカーブで転倒、みじめな顔つきになる。走り始めた時またまた松重さんのパンク。今度はタイヤそのものにもパッチゴムをはった。キリストの墓は、ウソのようなもっともなウソが書いてあった。金ケ沢の町で昼食、さあ出発という時、また小島さんのスポークが折れる。この日はハ戸まで行き、本ハ戸駅で泊まる。ここで、先に帰る永瀬さんとは別れる。駅前の食堂は、おかわりがただでしかもうまかった。なおハ戸市内で小島さんがまたスポークを折った。

走行距離　65 km

・第9日　8月23日

8時発。かったるいアップダウンのある45号線を走る。3時には久慈駅に着く。台風の接近により、キャンプは締め小袖まで走り民宿に泊まる。この日も、小島さんが4本、堀さんが1本のスポークを折り、スポークの修理のテクニシャンとなる。

走行距離 70km

。第10日 8月24日

台風も去り、8時45分出発。北部海岸有料道路を通り、黒崎キャンプ場にキャンプ。この日も 平木君がスローパンク2回、そして小島さんがまたスポークを1本折り、事故に巻き込まれる。有料道路は、厳しい登りで皆疲れ切り、3時半にはキャンプ場に着き、迫力のある海岸を散歩して、夜は玉子スープにトマトサラダで身心共に充足して眠った。

走行距離 31km

。第11日 8月25日

8時半発。北山崎の素晴らしい景色を見た後、豪快に下る。島の畝で、モーターボートに乗る。気分爽快のまま、一路龍泉洞へと向かう。砂利道にも慣れました。龍泉洞でテントを張る。水道はトイレから、晩飯は中華丼で、星がきれいでした。

走行距離 65km

。第12日 8月26日

ゆっくり龍泉洞を見てたら、松重さんが途中でいなくなってしまう。とにかく10時半出発。途中で松重さんを発見して安心する。この日も45号線のアップダウンのある、だるい道をひたすら走る。中の浜キャンプ場に着く。この頃、やたらと早く

キャンプ場につき、ゆっくりと食事ができる。この日も到着が3時40分。クリームシチューを食べ、階級闘争でヒマをつぶす。そろそろ合宿も終わりという感が増す。

走行距離　58 Km

。第13日　8月25日

もう、宮古駅はすぐ。浄土ケ浜で遊ぶことになる。遊覧船にウミネコが群がるのがとても楽しい。浄土ケ浜では、栗原や松重さんや堀さんが泳ぐ。宮古駅で輸行してから、ゆっくりと夕食と入浴へ出かけ、のんびりとする。盛岡行の列車に乗り、盛岡駅前のベンチで寝る。

走行距離　11 Km

。第14日　8月26日

いよいよ最終日。小岩井農場まで、荷物を下ろしてブッ飛ばした。小岩井農場で遊んでからまた盛岡駅までブッ飛ばし、栗原と松重さんを除いた4人がわんこそばに挑戦する。しかしやはり小岩井で食いすぎたのか　たいしたことなくダウン。盛岡駅で、笑と涙の対面!!ワイワイさわぎながら一夜を過ごして、夏合宿の幕を閉じた。

走行距離　37 Km

〈総走行距離〉
622 Km
〈事故〉
パンク　4回
スポーク切断　9本
転倒　大　1回
　　小　?回

8C-1

初めての合宿 金谷 健

＊期間 8/6(月)～8/28(木)

＊参加者 西原正人(3年、リーダー)
日比野十俊(3年)
中村伸悟(3年)
溝口正典(2年)
金谷、健(1年)

＊もこう。4回
旅館2回
コース4回
無人駅1回
公民館1回

＊8月16日(土)
午後7時26分、上野駅を出発。見送り、女性3名。西原さんの友だち。まず、ビールで乾杯をする。
さあ、これから合宿が始まる。がんばるぞ。

＊8月17日(日)
今日から走り始め。なぜか、走ると雨、止まるしやむ、とんなお天。2時ごろ早くも旅館に逃げ込む。初日から、ふわふわしたフトン。ビールは飲む。これでいいんだろうか…？
(矢櫃～大間 35km)

＊8月18日(月)
仏ケ浦は船から見たのは正解であった。美景というか、異景というか…。下北ユースでは、ジンギスカンの夕食にちゃげずに自炊。夕食後、日比野さんが肩にぶらさげて持って来たスイカを、パ

イトのお姉さんと食べる。
（大間ーんかす浦ーむつ 65km）

＊8月19日（火）
雨の中、恐山に挑戦。かなり苦しかった。ちが90分で終る。昼間だったからか、それほど不安味ではない。本日は、近川という老人宿に宿泊。夕食は、とうとうかしーである。
（むつー恐山ーむつー近川 45km）

＊8月20日（水）
このところずっと雨が降ったりやんだりで頭に来ていた。そのせいか、青森駅でひしぶりに太陽を見た時、いとくなつかしく思えた。青森駅付近の旅館に宿泊。
（近川……野辺地ー青森 80km）

＊8月21日（木）
本日は一日中晴天。東にいい弁当。十三湖の手前で、りすが死んでいるのを発見、みんなで道端に墓をつくる。まあ、すしがかわいらしい花をささげたから、あのりすちゃんも天国へ行けたことであろう。いい事をした後は必ずこがうまい。よく考えたら、なんと本日が初めて子こんをはれる日。夜は、ものすごい蚊と暑さ、覚悟はしていたものの、これほどとは思わなかった。
（青森ー鰺ヶ沢ー十三湖 68km）

＊8月22日（金）
金木にある太宰治の生家、中はなんと喫茶店になっていた。こんな事でいいのか？このへんではもう2学期らしく、家の前でかわいい小学生が学生もしていた。夕方、すごいどしゃぶりの中、運よくユースに辿り着く。夕食、日比野さんによる竹立見のコキしん。実にうまかった。西条さん、

洗たくのりでパンツを洗う。しかしけしの忠告により大事に至らずにすむ。（子三沖―金木―青森 75km）

8月23日(土)

台風の為、十和田に向かうのを延期。本日は休養日となる。青森市内をぶらつく。コースに連泊。

8月24日(日)

昨日、全く走らなかった為、笠松峠1040mは、雨にたたかった。くれ坂、峠に到達した時の景色は最高。十和田湖の子の口でキャンプ。夜、福島の高校生たちとキャンプファイヤーを囲んで楽、その後東洋大の人たちと話。れこと、キャンプっていいものだと思った。（青森―笠松峠―十和田湖 65km）

8月25日(月)

朝、船で子の口から休屋まで行く。発荷峠を越えて奥角、大里へ。ここで我々は土地の人の素朴な人情に触れ、忘れ得ぬ思い出をつくる。我々が神社の境内で夕食を作っていると、自分と子供達が集まって来た。子供ってかわいいから みんなで遊んでいた。暗くなるにつれて少しずつ寝って行く。ここまでなら、よくあることだ。

夕食を食べ終わった頃、さっきの子供たちの一人がお母さんと一緒に近づいて来る。大きなスイカを持って…。今度は近くのおばさんと高2の女の子が何か持って遊びに来てくれた。素朴でとても感じのいい女の子だった。

そして神社への宿泊許可をもらいに行くと、神社などでなく、公民館にして下さいとのこと。

公民館内では青年団の人達がいて、それまでの議論をかさねて中止して、夕りに酒をついでくれた。今こうして、土地の人たちから酒をついでもらい、共に語り合っているという事、夢のようである。寝る時、話がはずみやいた。

「こんなんもよな。これ……、旅のすばらしさってのは……」

（千和田湖―発荷峠―大里 45km）

8月26日（土）

朝、神社の境内、公民館を掃除。そして、子供たちと記念写真。玉川温泉、もちろん混浴、まこがれの混浴であります。昼間に一度、夜一度。夜はおばさん達でない女性もおりまして5人共、何食わぬふりをしつつ、心の中でこわごわしながら、のぼせるまで入ってました。

（大里―玉川温泉 35km）

8月27日（水）

下りばかりであったが、みんな疲れがたまって来た様子。田沢湖、とてもきれいだった。田代野代の丘から自転車で降りるとき、雨ったまま、ころがる。なぜかケガなし。夜、風の吹き上げのキャンプ。イヤ、もたく。

（玉川―田沢湖 70km）

8月28日（木）

一路、盛岡へ。途中で仙北の人たちと会った時、もうこれで合宿は終わるんだな、と実感して、妙にセンチになって来た。夜、ビヤホールで打ち上げ。

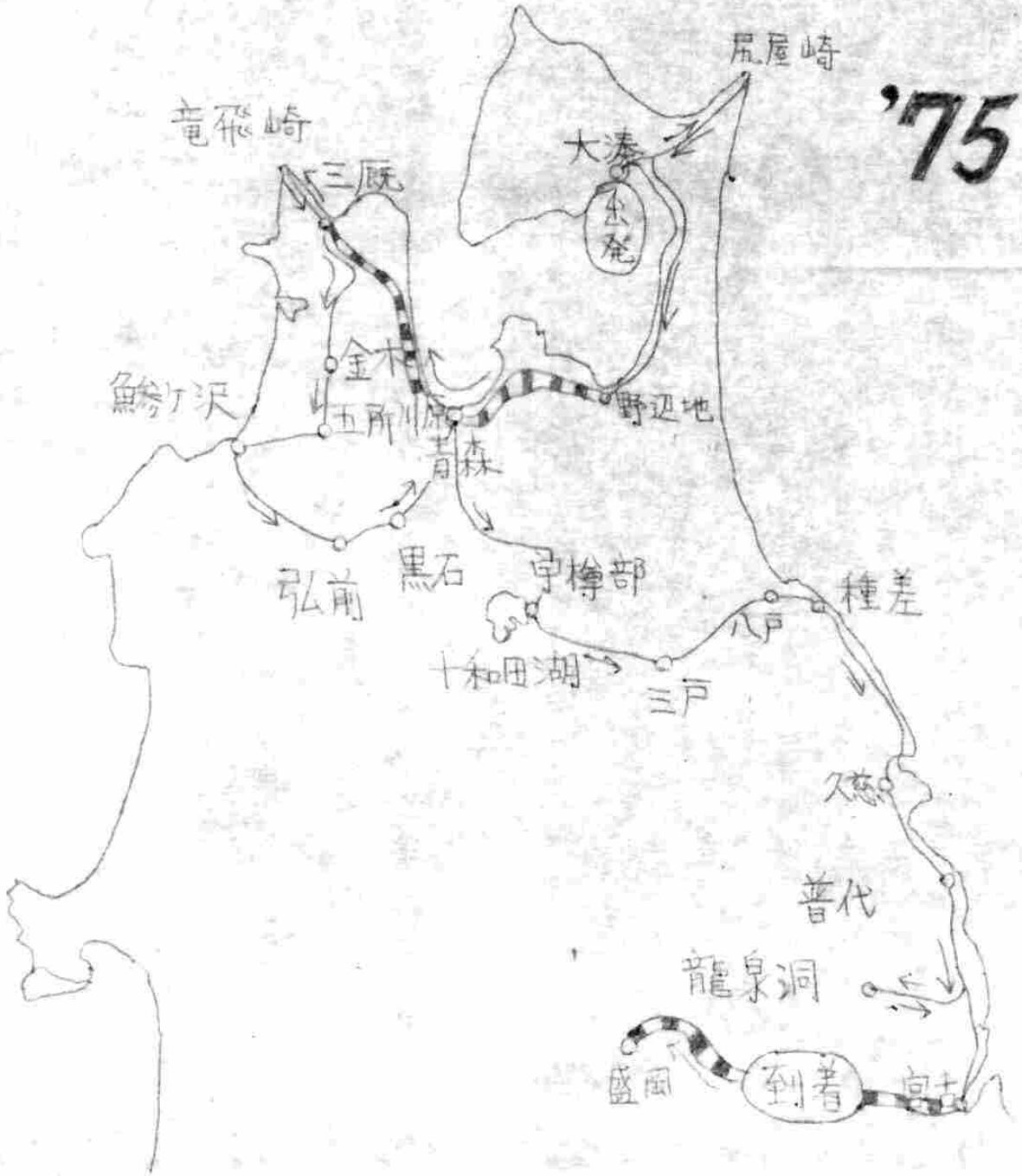
（田沢湖―盛岡 60km）

※29日、のうりんも食う。日比野氏の杯、金石氏の杯、佐藤氏の杯、中村氏の杯。金石氏、歩行困難に陥る。

8D-1

summer camp

'75



夏合宿　1975年 8/6 ～ 8/28

D班　藤倉，望月
野崎，富田

望月英臣

8D-2

第一日目

風屋崎を見物して陸奥市へ帰る途中、先頭から、野崎、富田、私の順に走っていた。私は先の二人よりは少し離れてついていた。

その時だった、先の二人が軽く衝突したらしく、ゆっくりとおり重なる様に倒れた。私は彼らがなかなか起き上がらないのをいぶかしく思いながらそこまで走った。着いてみると、なんと、富田の自転車のフロントフォークは手前に15cm位曲ってしまい。彼自身もけがを負っていたのだった。

そして、野崎はと見ると、彼の自転車はリヤキャリヤが曲っていた。

その事故の様子は、野崎が止ってあとの人を待っている時、富田が自分の自転車の具合いを見ながら走っていて、野崎の自転車に気付いた時は、あと数10cmしかなく、かなり激しく衝突したのだった。

フロントフォークが曲るほどの衝突だったのに、ワイヤーのリムはぶれがほとんど生じていなかった。なんて強いリムなんだろう。

みんなでなんとかその自転車を直して、少し進み、名もない海岸でテントを張った。(30km)

第二日目

陸奥市へ着いて、富田の自転車を修理してもらい、私もコンターピンを買い取りつけた。そこでB班の人達に会った。塚達に会えてとてもなつかしかった。

それから眼鏡屋へ行き(前日の事故で富田の眼鏡のレンズがわれた。)レンズを入れてもらってから、一路野辺地を目差した。

陸奥湾の東岸をだらだらと南下する。時々右手に海が見える他は林に囲まれた中を道は真直ぐに続いている。

海辺ではなく、はるか内陸を走っている様な錯覚を覚える。

日暮に野辺地に着いた、祭りでにぎやかしかが建ち、人出が多かった。材木屋さんの仕事部屋で泊めてもらった。(70km)

第三日目

野辺地から輪行して、青森で藤倉さんと合流し、三厩(みうまや)で下

3車した。竜飛へ行って帰る途中の
8D下り坂のカーブで、私は転んだ。
「アッ」しまった。やばい」
青函トンネルの工事中のため、ダ
ンプがうなりをあげて走っていた。
しかし、すぐうしろにダンプがついて
なかったのは幸運だった。
「助かった。本当に助かった」
三厩にもどって、どこで泊ろうかと窮
っていたら、飄然と杉浦さんに出会
った。そして運よく、三厩本町
会館にC班と一緒に泊ることが
できた。
その晩わが班は始めて夕飯を自炊
したのだった。腹いっぱい食べて、あとは
気持ちいい畳の上でのびのびと寝た。
（20km）

第五日目

金木へ行き、太宰治の生家へ訪
れた。そこは今では、斜陽館という旅
館になっていた。玄関の柱の太さが40cm
四方はあり、黒々と光り、威圧感があった。
太宰治がこの玄関を通り、この柱に
よりかかったのだと思うとどても親しみ
がわいた。
ここが当時、貴族院議員を歴任した
ほどの津軽第一の名士「津島家」であ

り、又津島修治（太宰治の本名）の一生に渡る苦悩と奮闘の源なのだ。

だが今は、ひっそりとした地方旅館である。

夕暮の迫る頃鯵ケ沢に着きテントを張った。（30km）

第六日目

近くの家の人から西瓜をいただきみんなで食べた。かもめが私達の頭上を低く飛び、その影がくっきりと地面に映り、地をなめて素早く通り過ぎる。

見上げると真白なかもめが、小さくなって青空に吸い込まれていく。海は紺青色で波は低い。のどかな朝だ。

冬のきびしい東北の海を知らない私には、のんびりとしていてとても住みよい所に思えた。

のんびりし過ぎて、出発は11:30になってしまった。岩木山の南を通り弘前へ向う。

弘前では旅館の客引にのせられ、結局そこで泊ることにする。木造モルタル二階建てで部屋は小さく、どことなく汚れていた。夜は旅館の名前が、赤いネオンで光っていた。今でもはっきりしないのだが、どうも連れ込み旅館

ムの様な気がしてならなかった。

P.D-

第七日目

（40 km）

十和湖へ向う。しかし、私達が来る少し前に津軽地方を襲った台風がもたらした豪雨は、大鰐町の九割の家屋を浸水させ、西から十和田湖へ通じる唯一の道路である国道102号線を、ずたずたに寸断していた。

家屋を流されたり、肉親を失った人々もいた。本当に御気の毒に思う。

私達は、青森から八甲田山を越え、十和田湖へ向うことに決めた。

そして黒石市を発ち青森まで走った。青森では青函フェリー乗り場のデラックスなビルの中の、運転手休憩所で泊った。冷房がきき過ぎて寒かった。

（50 km）

第八日目

八甲田越えはきつかった。10%の勾配の坂が数kmも続いた。ギアをフロントトップにしたが、それでもわずかにきつい。

しかし、日は思っていなくて、雨霧が

かかっているので暑さは感じない。
道の両側に壁の様にそびえる
杉の緑が、水気を帯びてしっと
りとしている。そしてやっと標高
1040の笠松峠についた。これ以上
登らなくていいという安堵感で
いっぱいだった。
暗く冷い水面が光る十和田湖
についたのは夕暮れだった。宇樽部
の民宿に泊った。そこの娘を誰か
が「ひなにまれなる美人」だと言
うと、それまで意識していなかった
のに、急に気になって女の顔をじ
っと見る。
それほどでもないんだけどなあ。
(80km)

第九日目

今朝はぬけるような青空だ。毎
日雨が続いていやだったのに、今日
は晴れたのだ。湖のまわりの空に
白い雲がぽかりぽかりと浮んでいる。
湖水の青さが目にしみる。そして休
屋へ走り出した。木漏れ日の中を
湖に沿って走る、快適だ。
ちょっとした坂がある。一気に登
る。かどまで登って先を見るとまた
上りだ。そこで又かどまで行ってみる
と又又上り、しかも勾配はきつくな
る一方だ。あせってくる。もう必死
でこぐ。こんな所にきつい坂はない

上はずなんだけどなあ。

80-

そのうちに野崎とデッドヒートを展開したあげく、抜かされて、へとへとになってやっと上りつめるとそこが休屋だった。人騒がせな休屋だ。

三戸について酒宴をひらく、酔って いい気分だ。星がきれいで、野崎が星座のギリシャ神話を話す。

「ゼウスはねーいろんな女神にーーーー。」

(60 km)

第十一日目

この頃は朝の用意が遅くなって、11時30分頃やっと出発するという日が続いた。そんな時、種差海岸のキャンプ場での未明のことである。

「日の出だ。」とすっとんきょうな声を出して、富田がテントを出ていった。何事かと思った私は、寝起きのぼんやりした(日頃は理知的なのだが)頭で昨夜のことを思い出した。富田は「明日は日の出に起きよう。」と言っていたのだった。

たかはんの冗談たとばかり思っていた。

しぶしぶ起きて外へ出ると、日は出たばかりだった。海の上に真赤な

太陽が出て、水面にこちらに向って真直ぐな光の道ができている。身がひきしまる思いがする。

宮田は自転車をかついで岩の突端に上る。そこで写真をパチリ。

（80km）

第十二日目

今合宿中初めたして最後の名所へ行く。水深20mの地底湖を持つ龍泉洞だ。水の透明度の高さには驚いた。

日が暮れてから、海岸沿いに宮古へ向う道にもどってきた。ライトの乾電池を三人分九本買い、これでもういくら時間がかかっても宮古まで行くんだと自分にいい聞かせる。宮古まではあと40kmだ。

しばらく行くと藤倉さんがパンク。修理をして、パンを買って食べる。田老町まで行って、又藤倉さんの自転車のタイヤの空気がぬけるので修理する。もう午後10時を過ぎている。宮古まではあと14km、上ったり下ったりの道なのでかなりきつい。

気分転換にと紅茶を沸かしていたら、「君達、何してるんだ

ね。」と中年の警官がやって来た。「いやな奴が来たなあ」と思う。富田がいろいろ質問に答える。

「……それで、宮古ではどこで泊るんだね。」駅の待合室で泊ることにしていたが、「友達の家で泊めてもらうことにしています。」と気転を働かせた。

そして、宮古の街の灯が見えるトライアインまでようやくつき、浜っ娘ラーメンを食べる。

宮古市内に入ったのは、午前0時を数分過ぎてからだった。

（100 km）

全走行距離 660 km

104-1

『雨の信州路』

原 哲一

・期日　十月四日～十月八日
・参加者　小島・岩根・原
・コース
（四日）新宿→新島々（夜行）
（五日）新島々→奈川渡ダム→東笠高原YH
（六日）YH→東笠山頂→YH
（七日）YH→野麦峠→長峰峠→開田高原→（民宿）
（八日）民宿→木曽福島→新宿

ここは松本電鉄の新島々駅。我々と共に降りた乗客は、皆、上高地や乗鞍山頂へ行くバスに乗り込んでしまい、駅にいるのは駅員と我々だけである。我々は、バスという乗物の誘惑を断ち切り、これから始まるサイクリングを楽しみにしながら、明るくなるのを待っているのだ。

「じっとしていても仕方無いから組み立てるか。」

「そうだな。めんどくさいことは先にやってしまおうぜ。」

といった訳で、自転車を組み立てることにする。

（ガチャ、ガチャ。カチン、コチン。）

すると突然、「ガッチン」という大きな音と共に岩根の声。

「あ！シートピン、折ってしまった。」

丁度、僕がスペアを持っていたので、問題はなか

ったのであるが、岩根の手付きを見ていると、朝八時頃出発。相模ダムまでは何とか持ったのであるが、それを過ぎた頃からポツリポツリ。これはやばい、急がなければ…と思っていると、

「ネエ！　モヨオシテンマッタ。」

と、岩根が言うのである。そこで小島が、

「エエ、サッキ、エキデスマセタバカリナノニ。」

雨がだんだん強くなってきたので、雨宿りを兼ねて近くのドライブインへ。ここに三十分程いたのだが、その間に、彼は〇回往復したのである。そしてその都度、ニコニコしながら戻ってきて、今のは満塁であったとか、ハネ満だったとか話すのである。彼のあの細い体の中に、どうしてそんなに溜まっていたのか、本当に不思議である。

トンネルの多い道なので、雨が降っていても、どうにか走ることができるが、台風によるものら

やっとのことで組み立てを終えたが、この岩根のチョンボは、我々（特に彼）の末来を暗示しているのである。空には、雨雲が深く垂れこめている。

しく、土砂降りになる。そこで、予定を変更して、乗鞍高原YHに走ることにする。ところが、国道一五八号線と別れたところで、岩根が、「パンクみたい」と言いだす。幸い、トンネルが近くにあったので、その中で修理をしたが、パンクの場所がよく分からない。そこで、水溜まりで調べたのであるが、やはり分からない。しばらく、グズグズしていて、結局、虫ゴムが悪いということになる。

途中、振っ建て小屋で仮眠し、ずぶ濡れになってYHに到着。雨の中の上りは非常に疲れる。屋根の有ありがたさが、これ程までにすばらしいとは…と思いながら、ベッドに。

次の日は、昨日の雨が上がり、何となく晴れてきそうな天気である。そこで、自転車を捨て、乗鞍山頂へ登る。

本当にすばらしい景色である。空は快晴。下の方は、ずっと雲海が広がり、所々から山が顔を出している。そして紅葉もすごい。

「今まで生きていてよかったなあ」

「この景色だけで、高いお金を出して東京からやって来た甲斐があったなあ」

「みんなに見せてやりたいなあ」

「乗鞍バンザ〜〜イ！」

しかし、山頂は興醒めである。僅かしかない山頂は、人でいっぱい。せっかくの三六〇度の眺望もだいなしである。

さて、次の日は、今回のハイライト、野麦、長峰越えである。朝九時にYHを出発し、乗鞍スーパー林道を奈川まで走る。そこで、燃料を買い込

んで、いよいよ野麦峠へ。

この峠の上りは、大きな石がゴロゴロしていて、ろ思いおしても、そっとする。（千円やるから、と言われても、二度と上りたくない。一万円なら考えるが…）非常に乗りにくいのだ。それでも、岩根は体が軽い為か、先に行ってしまう。うらやましい。

峠で食事を済ませ、舗装道を下っていると、いやないやな雨が降り出したが、予定通り長峰峠へ。この峠への道は、途中、上りのきつくなる辺りから、すばらしい道が続くが、峠からの下りは、いとい砂利道である。岐阜県と長野県の違いを、まざまざと見せつけられたのである。

ところで、さすが東工大生と思える岩根の言葉が、小島との会話で生まれたのである。体面にかかわることなので、あまり詳しくは書けない。（お酒を飲ませてくれたら…）

「もうすぐ○○○○があるよ」「えっ、そんなふうに言うの？」「そうだよ」「え～～～。僕、ずっと前から、○○○○○と言うのかと思っていた」

「バカだなあ」「……。余計な事言うんじゃなかった。小島君、みんなにバカにされるから、だまっててね」「さあ～～～～」

以上であるが、僕は直接聞いてないので、すべて、想像して書いたものである。

最終日は、朝からすごい雨。走る気力が全くなくなってしまい、甲田高原から木曽福島まで走って、輪行する。とうとう、あのきたない東京へ、帰らなくてはならない。

10B-1

「東海道ひとり旅」

○期日　十月五日(土)～八日(火)

○参加者　金谷健

○コース

※五日

下宿(品川)―箱根―蒲原　150km

※六日

蒲原―静岡―浜松　120km

※七日

浜松―名古屋―岐阜　140km

※八日

岐阜―関ヶ原―京都(宝ケ池)　130km

ひとりで旅をしてみたかったから、京都まで行って来ました。

「ひとり旅」

自分はそこに、他人との旅においては得られないもの――日常性からの解放――を求めようとしました。

十月五日(土)

六時十分出発。雨が降ったり、やんだり。川崎、横浜、小田原、そして箱根。まだ十一時過ぎ。上りはすごい雨。途方にくれる。すると、四十過ぎのおじさんが一人、前方10m、自転車をころがしているではないか！

おじさん曰く、

「こんな雨、嵐、たらいけねえよ。いいか、こっからゆっくり行くのが一番だよ。

思っていた自分、どうしてよいかわからなかった。
た自分。その一言で、ハッとした。そうだ、悪
いたら負け。また正午前ではないか。たかが、
箱根八里、こうかしたって何とかなるさ。妙な
もので、そう思うと、どしゃぶりの雨もすがす
がしく感じてくる。

それにしても長い、実に長い。あまりに実。
永久にこの山を越えられないのではないかと
思った。坂は急ではないが、何しろ長い。そ
れに、
つもし晴れていたら、どんなにすばらしい景色
だろうに、と
と思うと残念でならない。小学六年の時に見た
芦ノ湖、十和田湖など問題ではなかった。だが
その時のオレンジ、箱根とは一刻も早く抜け出
したい所でしかなかった。下りでこぼこ道ばかり続
にそうになる。雨が目にさしてくる。
三島、沼津、富士。ここに来て迷う。一号線
をまっすぐ走っていたつもりが、なぜか国道
沿道。実に不愉快なところ。この日は休日な
から、今考えると当然だろうか、巨大な工場が
ならんだ、
「誰一人」
いない事が非常にこわかった。
つもしかしたらこの世にオレ以外誰も生きて
ないのではと
などと考えたりした。実にこわかった。
その時、突然(オレにはそう思えた)西の空
が晴れて、光がさして来た。振り返るとそこに
は富士山、眼には大きな虹が。まさに、ま

と息を飲む景色！！。西の空の一隅から、カすかに光がさし込み、しだいに空が明るくなっていく。

10月一日

太陽がなんとすばらしいんだろう。

おしくも清水までは行けなかったが、あの切手で有名な蒲原まで来た。箱根越えで80km、初日にしてはよくやったと思う。駅前にある、唯一の旅館に泊まる。

十月六日(月)

今日は予想通り、青い空、やっぱりサイクリングは青空の下でかくてする楽しくない。旅館のおばさんに、今日は一号線をまっすぐ、豊橋まで行くつもりです、と言ったところ、

「ここまで来て日本平へ行かんかったらもったいないよ。」

と笑われたので、途中寄ってやることにする。

それほど急な上りではないので長泉に来ていると、いつになっても着かない。日本平にきて休んでたまるかと、ムキになって一気に行く。結局300の坂の上りであった。

だが本日のハイライトは、浜松のユースで会ったイギリス人夫妻。こんな機会は2度とないとばかり隣りの部屋にいる彼らへ所へ行く。もっとも奥さんの美しさに魅せられて……というのが本音。

彼らが知っている日本語は、たった三つ、「エキ」「アリガト」「オヨウ」のみと知ってがっかりした。だが、行こはオレの英会話の実力を発揮すれば何とかなると思った。

彼ら四年前、結婚と同時にロンドンを後にして、まずロンドン、アフリカ、オーストラリア、東南アジアと旅をして来て、二週間前に福岡に着いたそうだ。そのうち、南アフリカで一年、オーストラリアで一年働いて……。そして一週間後、ヨーロッパを回ってロンドンへ帰るそうだ。でもロンドンで働いて金ができたら、今度は南アメリカへ行くつもりだ、と言う。

そういう人々がこの世にいる事は知っているのだが、自分が今そんな人と話しているという事、どうしても信じられなかった。彼らの生き方を、つまりフルという言葉でしか表現できない自分が情けなかった。誰もが一度は考えるがなかなかできない生き方。オレもせめて彼らのように、ロマンだけは失わないようにしたいと思った。

京都の友だちに会いに行く、と言うと、異さしへすがいたずらっぽそうに、

"ボーイフレンド?"

と聞く。

"オブ コース!"

と言ったら笑っていた。

そしてやぶと知りつつ聞いてみる。

"なぜ旅をしているのですか?"

この返事が涙が出るほど、よかったんだなあ。

"To see beautiful sights, to meet many people, (painting to me)"

＊十月七日(火)

今日は、何となく走った一日。名古屋には昼過ぎに着いてしまい、少し早いなと思い、

市内見物としゃれ込む。熱田神宮、名古屋城、
10B－3
て、かくてながながよろしい。ともかくたきい
事はいいことなんだな。中に入ると、しらける
から城は外から見ていた。
四時過ぎに岐阜のユースに着いた。急に雨。
岐阜までの名岐バイパス、その車もものすごく
とばしている。国道も横なぐりにぬいてくるので
生きた心地がしない。やっと一宮を越したと思
ったら、また一宮。まったく頭に来る。
やっとの事で岐阜に着いたのはいいが、ユー
スまでおりるしくややこしい。あたりはまっく
ら。結局、金華山の頂上まで上り、やっとユー
スに着く。でもそこから見た岐阜の街、実にす
ばらしかった。
ペアレントに遅い、遅いと文句を言われた上、
あと知今でメシを食べ、かたずけて、フロに入
っておる、と言われ、かく然とした。
夜は同じ部屋に、井能から来たサイクリスト
がいて、ずっと話していた。正確には聞いてい
た、というできたろうな。なにしろ、彼はオし
ゃべり車のことといろいろ知っていると仮定して
一人で話していたのだから。オレも、そろそろ
いろいろと覚えもば……と思った。明日は、い
よいよ京都、友だちの顔が目に浮かぶ。わたす
ら晴れることを祈る。
十月八日(水)
朝、どしゃぶり。連泊かな……と思っている
うちに晴れて来る。同じ部屋の人に、例の井イ
クリストというんるに写真をとってもらう。
七時前に出発。チト遅い。大垣、西号線沿い

に日比野先輩宅を発見。あいにくも留守だった。

あった。おじさん曰く、

「東京でマーシャとでもやってるんじゃないで

すか」

オレも納得。

関"原は全く楽なもの。たがこことを思してから

ら一段と"関西"という感じになってくる。な

にしろトンネルのうりかもが急になくなってきたの

だから!!!。

夏、愛知県立大のワンゲルのんたちに会う。

伊勢湾から若狭湾へ、本州横断の途中とか!!。

宮にうまそうにりんごをすうみ姿がいた、イキ

な姉さん、という感じたな。みんないいんぼか

りなかでゆっくりしていたかったが、なにしろ

あと40kmあるので、やっぱりもしておれん。

南郷、草津、大津、そして逢坂の関。ついに

こうが、あこがれの俳京都。さあ、もう一息。

「京都市」

この標識を見たとき、なんか目が熱くなってく

る。とうとうオレ、来たんだな、と——とう!!。

なぜか編笠でのどしのぶり、思い出す。京都で

の夕焼け、とてもきれいだった。

10C-7

『信州ソロツーリング記』

野崎 信春

10/6
ペコーズ
茅野 7:00 (780m)
↓25km
麦草峠 11:30 (2140m)
↓30km
ビーナスライン
しゃくなげ YH 4:10 (1500m)
(五料白樺高原)

10/7
YH 8:30 (1550m)
↓20km
車山 10:10 (1800m)
↓15km
和田峠 (1500m)
↓15km
上和田 11:45 (840m)
↓15km
美ヶ原 3:15 (1960m)
山本小屋

10/8
山本小屋に停滞前線をはる。

10/9
美ヶ原 7:30 (1960m)
↓35km
松本 11:30 (580m)
↓35km
前川渡 3:20 (1040m)
↓10km
乗鞍高原 YH 3:55 (1550m)

10/10
YH 7:55 (1550m)
↓15km
冷泉小屋 9:45 (2220m)
↓9km
位ヶ原山荘 10:05 (2920m)
↓5km
畳平 11:15 (2740m)
↓
YH 4:25 (1550m)
↓
松本 6:35 (580m)

全走行距離 330km

道は緩やかだが、すぐに登りである。自動車はほとんど通らず、南えるのは小川のせせらぎだけ。汗ばむような秋晴れの下、360度の展望が広がる。何て素晴らしい眺めだろう。正面には八ヶ岳が雄大に聳え立ち、麦草峠の存在を示す鞍部も見える。振り返れば右後方に南アルプス、その右に中央アルプス、北アルプス、立山、白馬連峰が連なり、左方には霧ヶ峰、蓼科山を眺む。この大自然のパノラマの中、試験中の心のうっ積などどこかへ飛んでいってしまった。何て素晴らしいのだろう。そして僕は何てドジなのだろう。今回に限って カメラを持って来なかったのだ。(そして後で小島さんかご病院にされたのだ。) 麦草峠入口、茅野駅を出ると登りonly であり、雰囲気としては柳沢峠への登りと似ているが、展望の素晴らしさ

「は段違いに麦草峠の方がよい。茅野の町並も」
外れると、店はあるが水を補給する所が一ケ
所もない。峠にある麦草峠では水は有料であ
るから注意。途中、尖角石器遺跡に寄道する
。大昔 噴煙を上げるハケ岳の山麓に、狩猟
民族が歩き回っていたのだろうか。

〈尖角石器時代住居〉
内部は30cm位掘り下げてある。

10/7 は朝から雲り。車山では霧に包まれた。期待していた霧ヶ峰湿原はもう季節はずれ。花一つ咲いていない枯野原であった。ビーナスラインの終点の和田峠から R.142 を上和田まで標高差 650m をじっくりと一気ばしておりた。上和田はかなりの大部落である。そこから美ヶ原山本小屋まで県道になっている。美ヶ原落合までの 10km 位は舗装であるが、30×24 でもパテで塗れ、まは程キツく感じた平均で7%の勾配。砂利はいると勾配は緩くなったが、空がうにも泣き出しそうな気配である。道の側では、何かがガサッ ガサッと音を立てている。

峠からの下りは、アルプス連峰に頭から飛び込むような爽快なダウンヒル。ぜが途中からビーナスラインへ近道しようとして、地図にない別荘地帯に迷い込み苦労した。

と、突然野ウサギが飛び出してきて道端の草に隠れた。「オイ！ そんな所に隠れても無駄だよ。君は、僕の多数のおかずになるんだから。」と「呼びかけてみたが観念して出てくる気配はなかった。

た。美ケ原についたときは、ガスの中で何も
一見えず、山小屋を探し出して飛び込む様に
雨が降ってきた。
10/8は、昼過ぎまで雨でいやもすっきりと従
業員のY氏とグバっていた。雨が上がると
さ。そうと高原ボタリング。高原は全体が高
い台地状の牧場を為しているが、柵がしてあ
って雰囲気は良くない。夕方には晴れ上がっ
てきれいな夕焼け。シルエットのアルプス
が美しい。興奮も醒めぬまま小屋に戻ると、
何とジンギスカン鍋が僕を待っていた。ここ
では連泊者には表彰状を出すそうである。連
泊者は僕一人。男は僕一人。料理は二人分。
僕を取り巻く冷たい視線をはねかえして全部
平らげたのです。夜、外に出てみれば、空は

満天の星。アンドロメダ大星雲が肉眼で見えたの
が印象的だった。
10/9の朝は晴れ。丘に登れば空行く雲が何と近い
ことか。つっと足元を見れば、マツムシ草が一輪
だけ咲き、側の岩の上では百合が日向ぼっこ。何
ともどかである。王ケ頭を越えて駐車場の方へ
降りて行くと、そこは人おろし。もう今朝までの
静けさはない。早々に美ケ原林道を松本に下る。

松本からは、梓川の清冽な流れに沿って前川渡
まで登っていく。僕はその途中でM君と劇的な出
会いをしたのだ。僕は一人リュックパッカーを
追い抜き、少し先で止まって休んでいた。そして

彼が追い抜くとき、僕にぶつかったが、それが何者だ、た。その時は誰だか分らずそうまま行、てしまった。だが、それに慣れてみると彼がいる。そして話をしているうち同じ東工大生だと分かり、その上彼は、僕と独語のクラスが同じで、彼はいつも僕の左斜前に座っていたのだった。世間は全く狭いこと。

10%は、同宿のスポルティーフ氏と、しょに乗鞍に登る。勾配はそれほどきつくはないが、大きな岩がたくさん埋まっていて大変走りにくい。標高2000mを越えると一面の紅葉。ダケカンバ、ナナカマドが美しい。スポルティーフ氏は僕より5分早く出発したのだが、位ケ原山荘付近で、と追いついた。スポルティーフ氏はあかるみの中で見事に転倒し

ていた。上に行くに従って道は段々悪くなっていく。自動車がトランスミッションをガリガリさせながらはっていく。寒い！ヤッケなどを着こんで初めてだ。登山に慣れて来風に思わず小屋に逃げ込むと、そこは人でいっぱい。乗鞍スカイラインを登ってくる観光客はセーター姿が目立つ。何も見ずに車に引き返していく。

遅れて登ってきたスポルティーフ氏は長袖シャツにバミューダの出立で震えている。

乗鞍岳へは肩の小屋まで自転車で行ったがその先は冠雪していてとても無理。徒歩で頂上を踏む。すべてのものが足元に見えている、そしてすべてのものが素晴らしかった。

秋のフリーラン
軟弱ビーナスライン

。でぃと　10月6日　～　10月9日　3泊4日

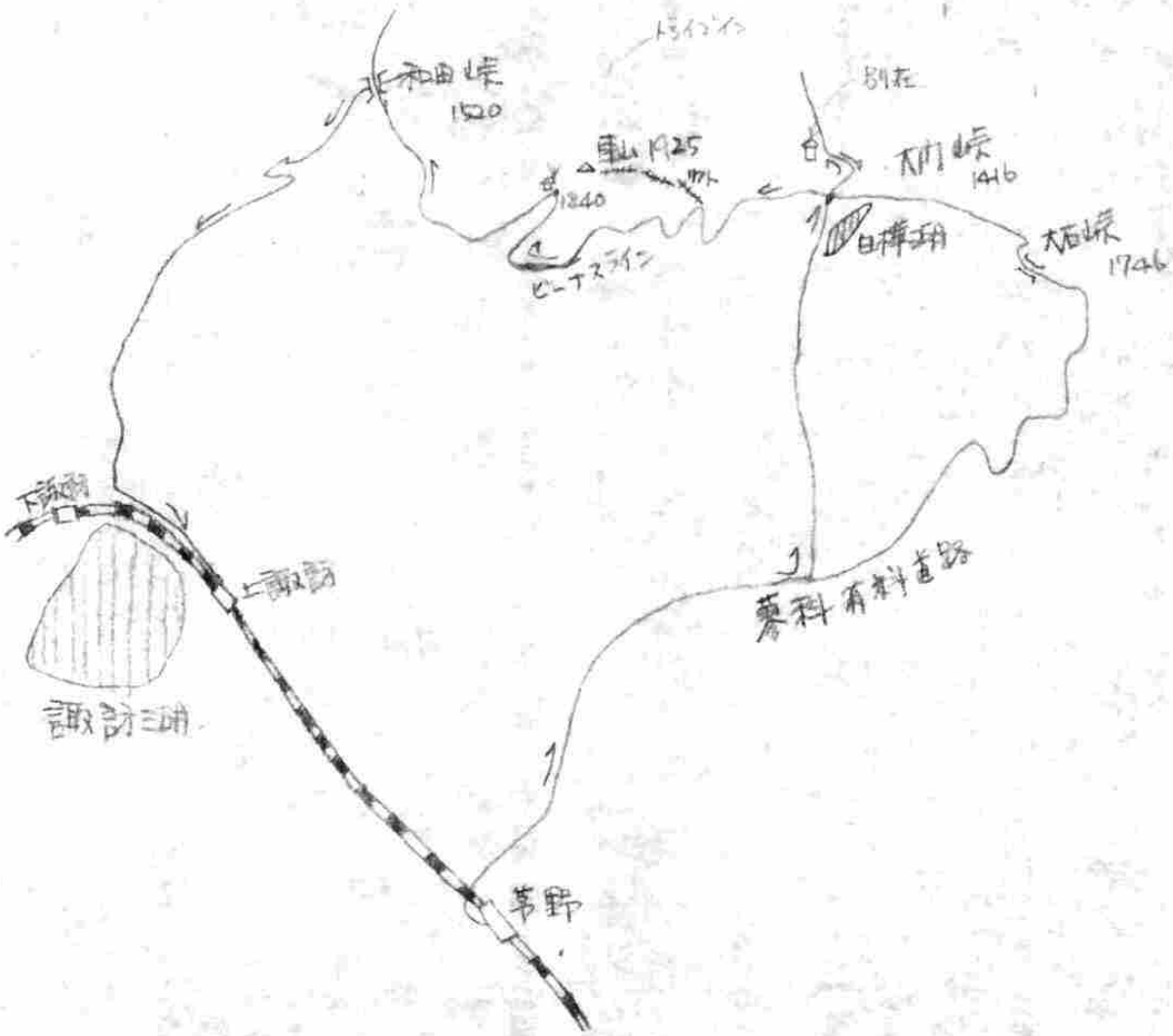
。めんつ：冨田 尚、沢木至、名取暢、鈴木俊明

。こーす
6日　新宿 → 芦野 → 大門峠 → 別荘
7日　別荘 → 車山 → 白樺湖 → 別荘
8日　ふりーでー
9日　別荘 → 車山山頂 → 霧ヶ峰 → 上諏訪

。りぽーたー：冨田 尚

十月六日、午前、おもむろに起きあがる。時計を見ると、なんと八時ではないか。一瞬、茫然とした。なぜなら、六時半に集合となっていて、私リーダーであった。かといってどうする術もない。ただ急ぐのみ。新宿につくと当然だれもいない。十時発の〝あずさ〟に乗った。一刻も早くという私の気持を無視して、あずさはゆっくりと走る。やっとの思いで芦野についた。心を落着けて下ムに降りる。誰もいない。改札口を出る。どういうこっちゃ、誰もいないではないか！　再び茫然とする。輪行袋も自転車も見当らない。どうしよう。ベンチに座ろうとすると、後ろから「冨田」聞いたことのある声。振返ると鈴木君がいるではないか。彼の顔を見て、うわずっていた心がやっと落着きを取戻す。「沢木と名取は？」「知らな

いし　以外な客が返ってきた。仕方なく二人で自転車を取り始める。間もなく下ムにアルプスニ号がすべりこむ。求不と名取が降りてきて「コラー、トミタ！ナニヤッテンダヨー」駅中に響きわたる大声。私は恥しさと嬉しさでつい笑ってしまった。自転車を取り終し、昼食を三人に着るへチョンボ料予定を変更して夢科山を直ちず直接大門峠から別荘へ行くことにした。途中夢科有料道路を通る。有料道路とはおそまつな道である「日本で最初のものだ。」という名取氏の解説で納得。ガケ沢で大門街道に入る。このあたりから一段ずいに登りがきつくなってくる。最高でナ%ないのでうれしかぎりでもないが、夏以来、あまり体を動かしていない上、高原な



10D 2

ので気温が低く　夕暮近かったこともあり、最初に疲の足がつりはじめた　半分くらい登った所で小休止。再び走り始めるが　百米も走らないうちにまたつりはじめた。今度は両足。仕方なく再び小休止　十分に足をほぐして再出発、なんとかごまかしながら登ってゆく。路傍を流れる渓流がなんともなたそうである。しばらくすると、汚ない水を湛えた白樺湖が眼前に現われた。やっとついた。ここまでくれば後は下り。別荘は姫木平にあり、大門峠から百五十米ほど下にある。日は今にも西の栗鞍山に隠れようとしていた。下り始めから十分、続いて七・八分とさっと下りが続く。高原の風は、汗をかいていたこともあり　必要以上にはたく感じる。別荘についたのが六時。一息つけてから、食事をすませ、明日の打ち合せ。霧ヶ峰まで行くことに決定。この日のメニュー、富山名産のクリームシチュー。

八十月七日〈

七時に起き、朝食をすませて空を見ると　どんより曇り空　皆の口からため息が出る。出発前の整備をするが、この時　沢木氏が昨日からおかしかった　バーの止めネジをナメってしまい　全くきかなくなってしまった。しかしどうすることもできず、仕方なく出発。最初のピークは大門峠である。「きのうは寒かったなあ。」「あのコーナーはきつかったなあ。」等々　口々に　楽しそうに登って行く。しかし　その内登りもきつくなり、話しする余裕もなくペダルを踏む足に力が入る。なんとか登りきり　これから彼の有名なビーナス

ライン。大門峠とは打って変ってだらだら坂。
ヤンタラ登り始めるが、心配していたとおり
したいにガスが濃くなってゆく。視界が二〜
三十米になったため、ライトの点灯を禁。
ガスの濃さに比例してどんどん寒くなって、
全く体が暖まる間がない。ついには十米先は
なんにも見えなくなってしまった。こうなる
と、今が昼なのか夜なのか、自分はいったい
どこにいるのか、と、まるで夢の中をさまよ
っているという錯覚である。しかし二人な
日に走るのは、おもしろいがあまりいいもの
ではない。早く晴れてくれないかなあ。数分
後、急に下りはじめた。すると前から聞き慣
れた声だけが聞こえる。先を行っていた居取
と沢木である。イニシでよしまいか。

なんとなくあっけなかった。標高二八二〇米、大
門峠からプラス三八〇米。急いでドライブインに
入り、トウモロコシを食べながらこれからどうす
るか相談。雲ケ峰をあきらめて引き返すことにな
った。外に出ると恐ろしく寒かった。フロントガ
ラスやボトルに霜がおりているのを見た。白
樺湖まで降りてくると空はすっかり晴れあがり
車山の頂上まで見えるではないか。×○！一同
残念。白樺湖を一周。エノモトさんの知り合いが
やっている。モニクレア"という茶店へ行って コ
ーヒーを飲む。なかなかいいムードの店だった。
再び暴行がおかしくなり、雨がぱらぱらとしはじ
め、急ぎで戻る。ゆっくりと夕食をすませ、個人
ですることといえば、麻雀。八時ごろからはじめ
終ったのが翌朝六時。

〈八月八日〉

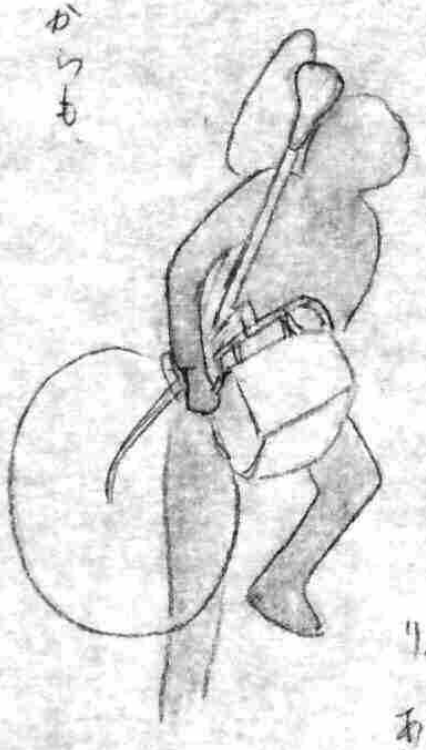
午後二時、ゆっくりと起き、部屋の掃除などをして、軽く運動をして、夕食。明日は扉峠を越えて松本までと、出発し早めに寝る。今夜のメニュー"肉、野菜いため"と"シャケイモの煮っころがし"

〈八月九日〉

前日、前々日と打って変って、快晴である。とても気持がいい。今日は頑張るぞと軽快に出発。ドライブインまで前々日と同じ道であるが、晴れと曇りではずんぶん気分が違う。途中リフトのりばがあり小休止のつもりで止ったのが、この日の大主役番くるわせ。結局金曜一級で、自転車をおいて、リフトでのり重山頂上まで行くことになった。重山はハゲ山で木がほとんどない。が、その少ない木々は半分紅葉しており、高原の秋の早さを感じさせる。頂上につくとこれが驚きであった。北アルプスの山々、誰かさんが行った乗鞍、南アルプス、八ヶ岳、浅間山、富士山までも、ワーッと見えるのである。百感感激のあまり声も出なかった。本当に予定を変更してよかった。しばらく休んで、まわりを見下ろすと、白木峰下にビーナスラインが通っている。そこで変更ついでに、もう一度ここへ自転車で上ってこようということになった。

ドライブインにより登るのだが、頂上へは二つのルートがあった。一つは軟弱なハイキングロードこれは乗ったままで楽に上れる。もう一つはかなりハードな直線コース。その道は雨の水が流れ落ちたためできたと思われる道で、草もなく、

大きな石が顔出していて、それらの石が連って一種の階段状になっているような道で、我々はそこを、自転車をかついで登ることにした。階段状といっても、階段のようにおだやかではなく、石の上にコケがふさっており、チョコスチョコはよく滑るのである。又、勾配といえば、四十五度もありそうなほど急なものである。いうなれば、ロッククライミングを少し駅ぶにし長くしたもの。決して楽なものじゃない。その道は下からも上からも一望でき、下を行く女性ハイカーたちの黄色い声にはげまされ、一同、黙々と登ってゆく。一、二度、足をすべらして、後ろに倒れそうになる。もし倒れればまず不幸は免れない。頂上についた時は満足感でいっぱいであった。もし初めて上ってきたのだったらすれはも何十倍にもなっていたろう。このあとハイキングロードを下るのだが、これがもう、大きな和ぼっかりゴロゴロしていて、まるでこの石のにっこうがしゃと言う感じ。難なくトライヂャンまで戻り、あとは駅前まで下りぼなし。



今回のフリーランは、観光旅行を目転車でやったといった感が強くないが、最後に一つ花を添えたといえる。又、雨が降りそうでしたことや、出発前に十分な打合せをしなかったのがまずかったと深く反省しております。

ああもメラがあればなあ！

NAO:

10E-1

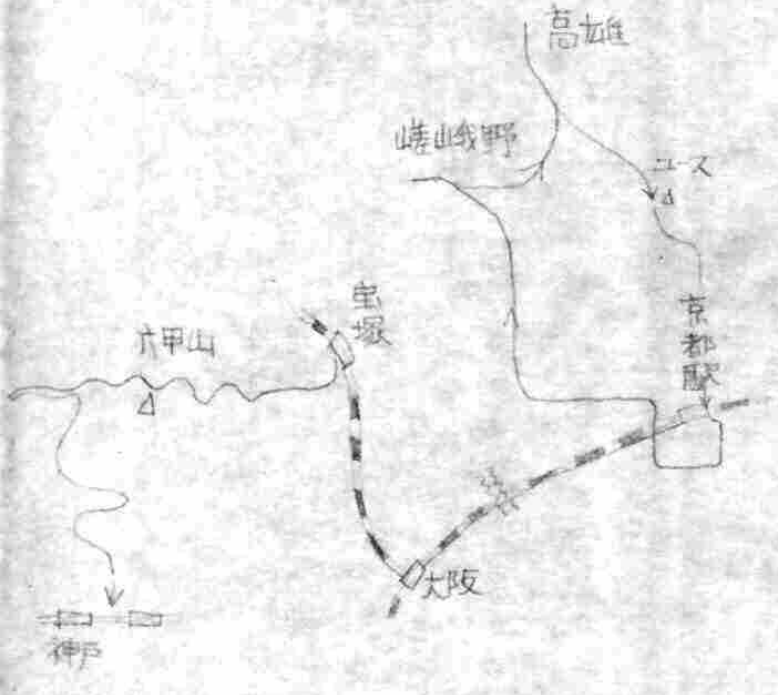
京都・神戸のんびりフリーラン！

宮谷一夫

期日　10月5日～10月8日

コース　京都→市内→京都→宝塚→六甲山→三ノ宮→神戸

キョリ　七〇km



10月5日　東京駅から「銀河」に乗り込んだ。もう外は真暗。輸行袋を通路において朝まで眠った。

10月6日　午前4時30分　京都駅に着いた。重い輸行袋をかついで改札を出て、まずは朝めしを食った。修学旅行生や通勤客を横目にさっそく組み立てはじめた。するとチェーン蓋を忘れたのに気つき駅近くの店で買った。自転車はまあまあ快調で　東寺までもの四五分で着いた。しかし拝観料が高いので外からみながら、再びペダルを踏んで西へ進み　桂橋を渡ると山が前方に見え　寺もすぐそばだ。ここで十分休憩を取り午前11時頃嵯峨野へ向った。京都の町はたいへんだが自転車で走ると実はとても涼しい。嵯峨野にもあっという間に到着し　ちょっと早いが昼めしに湯豆腐を食べた。（少々値段は高かったが）嵐山付近は交通

量ち少なくとても身体をあたためよかった。昼食後は嵐山高雄パークウェイを通って高雄にでようとしたら料金所で自転車はだめだと言われしかたなく迂回してR162を通り高雄に行った。途中、北山一帯を回わって来たと思われるサイクリストに出合った。高山寺、神護寺などを見て夕方早々とユースに着いた。この日の天候は快晴

10月17日、昨日の天候とはうって変わって曇だ。低気圧の影響で午後から雨だとのことだ。そこで宝塚まで輪行して行った。宝塚に着くと小雨が降り出し山のあなもやがかかっている。急いで昼めしを腹につめ出発した。初めから川沿いに急な坂を登りはじめ勾配はたゆるやかにならない。ゴルフ場をすぎた頃からたまらずインナーに落とし30分登って休憩、それから20分、10分登って休憩で短かくなり山頂までの1kmのところでたまりかねて降りて押しはじめた。すると山頂まで5と6kmの付近から濃い霧が発生、風も強くなりどこを走っているのかまったくわからない。ガ既はややゆるくなったせいか自転車でとっやら登れるようになり いつの間にか峠を通り過ぎた様子だ。峠を越したらしく下り坂の勢い 牧場についたのは午後3時半、雨がひどくなってきたのでゴルフ場を通って表六甲道を通ってあっという間に三ノ宮についた。下りがこれほど恐く感じたのははじめてである。

10月18日 朝方雨が降っていたが晴れたなやみは全くゆるやかにならない。ゴルフ場をすぎた頃から

神戸港を見物し 夜更新に着いた。

'75 秋休みツリーラン

― 渋峠 ― 藤原

10/9～10/10

コース　志賀草津高原ルート

長野原 P.M.1:00 —¥10 草津有料道路→ 草津 2:20 —¥20→ 白根山 4:20 4:45 —¥20→ 渋峠 5:20 [2172m]

→ 熊の湯 P.M.5:30 YH A.M.8:30 —¥20→ 上林 9:20 → 湯田中 9:40

長野原 → 湯田中は50km前後と思われる

まだ先輩達が行ったことがなく、標高が二〇〇〇米以上の峠へ行ってみたいとかねてから思い群馬県と長野県の境にあるこの渋峠に目をつけ今回実行したわけであります。しかしながらスタートからつまずき　まず朝寝坊をして予定の電車に乗り遅れ、しかもその後乗った電車が間違いであるのに気づき　何だかんだしているうちに、長野原に着いたのが午後〇時〇分、最初の予定では午前10時半には出発するつもりだったので大ポカロス　一時は断念しようかとも思ったが、悔いが残るのでとにかく走ることにした。まず宿を確保しようと熊ノ湯のユースに電話したところ、原則として電話予約はやっていないので、より道せずにち時までに来てくれとのこと。アーアこれから一三〇〇米くらい登るのに人事だと思ってと嘆い

いていてもしようがないので、「できるだけ努力してみます。」と言って電話を切り、大急ぎで自転車を組み立て、駅の立喰いそばで軽い昼食をとり、午後一時にやっと長野原をスタート。思えば、この「軽い昼食」が、後に私の行く手を大きくはばんだのであります。

まずは準備運動に草津有料道路を草津まで。全長九・五粁であるが七粁以上は登りで下りはほんのちょっぴり。景色もよくないし、つまらない道路だ。料金所のおじさんに「渋峠までどのくらいですか」と聞くと、十七粁ぐらいとのこと。草津温泉方面と白根山方面への分かれ道でちょっと休み、コーラを飲み、ボトルの水を補給して即出発。さあ登るぞ！と意気込むと、前方に見えるのは、急勾配の凸凹道、まさかこれがずっと続くのでは、とおびえながら登っていると間もなく道が良くなり有料道路入口に着いた。金二拾円也を払ってまずは白根山をめざしてスタート。路側に距離が出ているのでこれを目安にペダルをこぐ。天気は快晴、車も少なく順調なペースで登る。間もなく標高一五〇〇米の標識を過ぎ、硫化水素の臭いが鼻をついたと思うと殺生ケ原が見えてきた。草木は一本もなく地表のあちこちから蒸気が噴き出している。渋峠を境にして群馬県側は、大きな木がなく、ごつごつした岩肌と草原が大部分をしめる。その中に点在するまっかに紅葉した木（名前わからず）が印象的であった。殺生ケ原を過ぎたところで小休止。自転車をとめ、草の上に寝ころぶ。空には雲一つなく遠くに連なる山々もよく見える。しかしそれに

しても腹が減った。猛烈な空腹感だ。それもそのはず、他称大食いの小生が立食いそば一杯でここまで登ってきたのだから。おまけに寒い。太陽が照りつけても少しも暖くない。空腹と寒さに気づいたら急に弱気になってきた。もう体もほとんど通らない。とにかく早く峠を登ってしまわなければならない。トレーナーを着、ヤッケを着て再び登り始めた。けれど腹が減ってどうにも足に力が入らない。それに体の中はカッカしてるのに表面は汗一つ出ず変な感じだ。これから先は全く悲惨な戦いであった。一、二粁走っては自転車を止め、ゴロンと横になり、足をマッサージし、ボトルの水を一口飲み、ひざの屈伸をしてまた登る。この繰返しであった。飢えと寒さと疲労でもうだめかと思ったが、なおも小生にペダルをこがせたのは、「日が暮れたら死ぬ！」という言葉を読んだ人はオーバーな！と思うでしょうが本当にそう思ったのです。という恐怖感と、「白根山に行けば何か食物にありつける！」という期待であったのです。

11A-1

工大祭参加記録

今年もサイクリング部は、工大祭に甘酒屋を出して参加した。実際の仕事を行ったのは、新入生（富田　金谷　栗原　沢木　名取　玉谷　鈴木　計七人）だけで、また準備期間も短かったので、非常に忙しかったが、それだけに楽しかった。

十月二十日　（工大祭前日）

この日までに、ようやく売り物の準備が終わった。団子も店に注文したし、一週間もまりかかってようやく、大部分の甘酒が完成した。午頃から、食器の手配や看板書きを始めた。この頃から雨が降り出して、翌日の天気が心配された。晴くなってからこの雨のを、角材を持って飛び上がったり、看事をしたりして、やっとの思いでテントを張って店を組み立てた。これでこの日の仕事も終わった。そこで、前夜祭の五輪貞弓コンサートを、当クラブがその入場係の仕事を担当している関係上、皆で無料で聴いた。しかし無料とはいっても、コンサート後、演奏道具の後片付や演奏者達の茶汲みを行った。それも終えて皆でたむろしていると、日出野さんと富田君が、茶汲みをして楽屋から戻ってきて、「五輪貞弓の着替えを見てしまった。」と言い出した。しかしよく聞いていると、靴下をはく所を見たのだそうだ。

十一月一日　（工大祭初日）

いよいよ昨少し前から開店した。しかし、誰も買いにこない。呼び込みの金谷君が、二三人連れを

を呼び込もうとするのだが、皆逃げてしまう。ただ、どこかのおばあさん一人だけが、団扇がないので顔面に火の粉を受けながら直接口で息を吹きかけ焼団子の火をおこしている沢木君と名取君の姿を見て同情し、帰りがけに買っていってくれると約束していった。

ところが、おやつの頃に売ってくると、状況が大逆転した。つぎのようにどんどん売れた。焼団子が注文に応じきれず、団子を焼いている前には、常に二、三人の客が自分の順番を待っていた。

一方、留谷君と栗原君担当の甘酒売場では、その頃甘酒の失敗作が出回った。焦げて、薄茶色に染まり、チーズの焼けた時の匂いがするのだ。これに対して二人連れの客が文句を言ってきた。杉浦さんが、「これが、天然糀からつくった甘酒独特の味で、酒粕からつくった甘酒しか飲んだ事のない人にはわからないのだ。」と説明すると、その客さんはしぶしぶ帰っていった。

以後この甘酒は販売中止となった。

暗くなってからも売れ行きは止まなかった。近所の小中学生が、しつこく一人で何回も買っていった。後ろが甘酒屋の他にやっている貸自転車で、そこら辺を一回りするたびに、団子を一本ずつ買ってゆく子もいた。

店仕舞する頃、どこからか、酔っぱらっていい気分になった中村さんがあらわれて、何と四千円もかこばたと言って置いていった。中村さん自身この事をしゃべって日比野さんに教えてもらうまで全くわからなかったそうだ。

十一月二日（工大祭最初日）

この日も、第一日目と同様に午後によく売れた。甘酒と焼団子の他に、冷や酒とコーヒーも売り出した。また、麻雀牌を貸出しテレビを置いた。丁度、日本シリーズの中継をやっていたので、たくさんの人が集まった。後には、一人で焼団子を十五本も買う人や、お釣り七百五十円をカンパしてくれるおばさんもあらわれた。

十一月三日（後片付、打上げ）

明るいうちに後片付を終えて、夕方頃から打上げコンパを始めた。このコンパでは、名取君が乗りに乗って、踊り唄をしたり、長いすの上で腕立て伏せをしたりして、とてもにぎやかだった。

114

こうして、工大祭に関する事がみんな終わった。明日からまた平凡な生活に戻るのかなと思うと、何だか気が抜けてきた。

MEMO

東工大サイクリング部